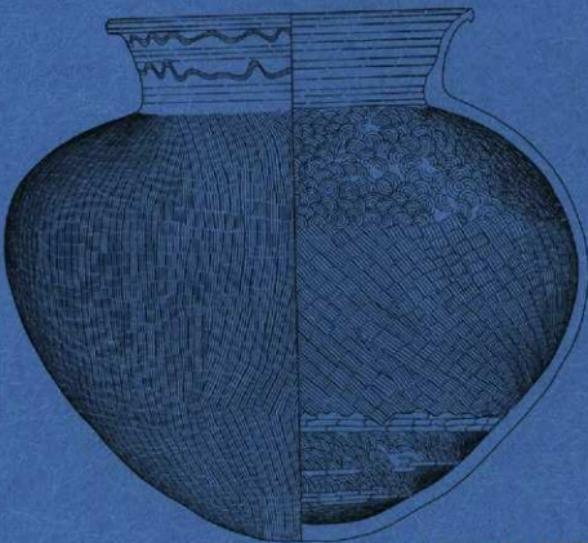


K-552

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第57集

# 大神窯跡

大神窯跡発掘調査報告書



大神窯跡BN2出土須恵器大壺

平成10年3月30日

米沢市教育委員会

# 大神窯跡

大神窯跡発掘調査報告書

平成10年3月30日

米沢市教育委員会

## 序 文

本報告書は、平成5年に国庫補助事業の詳細分布調査の中で実施した大神窯跡発掘調査の成果をまとめたものです。大神窯跡は、奈良時代の末葉期に位置する登窯跡で、須恵器と呼ばれる古代の焼き物を生産していた遺跡です。本窯跡の近くには、米沢盆地の中で最大の規模をもつ川西町の塙山窯跡群が分布しており、大神窯跡との関連が以前から注目されてきた遺跡でもあります。

今回の調査では、確認した2基の窯跡のうち、BN2とした半地下式の登窯を調査したところ、焼成終了の段階で窯跡が崩壊し、窯内部の製品が当時のままの状況で確認されています。こうした報告は、大阪府の陶邑古窯群で確認されているだけで極めて珍しいものです。本市には県内最古の木和田窯跡を始め、現在までに5箇所の窯跡の存在が確認されていますが、大神窯跡のように数多くの資料を検出したものはほかにありません。

特に注目されたのは、出土した製品の中に稜塊と分類される須恵器の高台坏が数多く含まれていたことです。稜塊は米沢盆地を中心に、県内の14箇所の奈良時代の遺跡から発見されていますが、その多くが古代の官衙や公的な施設と推測される遺跡を中心に出土しています。本市には置賜郡衙と推測されている大浦遺跡群、郷衙の可能性をもつ笛原遺跡、それらに深く関わりを有する戸塚山古墳群などが存在しており、関連が注目されるところです。

米沢市を含む置賜地区は、日本書紀の持統3年(689)の項に「置賜」の地名が記載されているほど、古代文化の先進地域だったのではないかと考えられます。今後は、当地域の須恵器生産の成立と普及を前提に古代官衙の役割についての解明に向け尽力する所存ですので、関係各位の御理解と御指導をお願い申しあげます。

最後になりましたが、調査に際しご指導ご協力を賜りました文化庁、県教育委員会文化財課、地元の神保豊彦氏、島貫源太郎両氏、さらには貴重な資料を提供いただきました東北芸術工科大学の加藤 稔教授に対し、心から御礼申し上げます。

平成10年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 相 田 實

## 例　　言

1. 本報告書は、平成5年度に文化庁の国庫補助を受けて実施した、市内遺跡発掘調査（遺跡詳細分布調査）の一環として行った大神塙跡の調査報告書であり、既に「遺跡詳細分布調査第7集」の中で一部を記載しているが、多量の遺物が検出されるなど予想外の成果を得たことから、当塙跡のもつ重要性を鑑み、改めて詳細な報告書として発表するものである。

2. 調査は、遺跡の範囲と遺構の分布状況・性格把握を目的に、平成5年10月1日から同年12月2日までの日程で実施した。

3. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体　米沢市教育委員会

調査総括　木村琢美（文化課長）

調査担当　手塚　孝

調査主任　菊地政信・月山隆弘

作業員　穴沢茂雄　遠藤忠一　菊地芳子　黒沢栄恵子　黒沢富雄

　　黒田芳子　小浦文吉　斎藤辰雄　坂野睦子　佐藤　繁

　　富樫福次　中島国雄　松本三郎

事務局　我妻淳一　平間洋子

調査指導　文化庁　山形県教育庁文化課

調査協力　加藤　稔　川崎利夫　神保豊彦　島貴源太郎　水野　哲

　　川西町教育委員会

4. 掘図の縮尺は、須恵器の実測図として壺・稜塊・蓋を1/2、壺・甕を1/3の縮尺率を基本としたが、大甕に関しては1/6、拓影図を1/4とした。遺構の平面図に関しては、各掘図にスケールで示した。遺構の記号は、窯跡-BN、土壌-DY、溝跡-KYとしている。

5. 出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室(米沢市万世町桑山200)に一括保管している。

6. 本書の作成は手塚孝が担当し、整理段階で菊地政信、田中みづ、近野慶子の3名が補助した。編集は手塚、責任校正は小林伸一と山本卯がその任務にあたった。

## 本 文 目 次

1	遺跡の概要	1
2	調査の経過	1
3	窯の分布	3
4	検出遺構	3
1)	B N 1	3
2)	B N 2	7
3)	K Y 5	10
4)	D Y 4	10
5)	D Y 3	10
5	検出遺物	10
1)	A群土器	12
2)	B群土器	12
3)	C群土器	17
4)	D群土器	48
5)	E群土器	55
6)	F群土器	83
7)	G群土器	83
6	要約	83
1)	窯体と須恵器生産	83
2)	壇山窯跡群の資料	87
3)	大神窯跡の須恵器の法量	87
4)	稜塊の分類と年代	91
5)	大神窯跡の須恵器の特徴と年代	93
6)	まとめと課題	94

## 挿 図 目 次

第1図	大神窯跡周辺の遺跡分布図	2
第2図	壇山窯跡群の分布・第1地点の窯平面図	3
第3図	大神窯跡調査区全体図	4
第4図	大神窯跡B N 2平面図	5
第5図	大神窯跡B N 2遺物出土状況図	6
第6図	大神窯跡K Y 5平面図	8
第7図	大神窯跡D Y 3平面図	9
第8図	土器調整手法分類図	11
第9図	大神窯跡出土須恵器実測図(1)	13
第10図	大神窯跡出土須恵器実測図(2)	14
第11図	大神窯跡出土須恵器実測図(3)	15
第12図	大神窯跡出土須恵器実測図(4)	16
第13図	大神窯跡出土須恵器実測図(5)	18
第14図	大神窯跡出土須恵器実測図(6)	19
第15図	大神窯跡出土須恵器実測図(7)	20
第16図	大神窯跡出土須恵器実測図(8)	21
第17図	大神窯跡出土須恵器実測図(9)	22

第18図	大神窯跡出土須恵器実測図(10)	23
第19図	大神窯跡出土須恵器実測図(11)	24
第20図	大神窯跡出土須恵器実測図(12)	25
第21図	大神窯跡出土須恵器実測図(13)	26
第22図	大神窯跡出土須恵器実測図(14)	27
第23図	大神窯跡出土須恵器実測図(15)	29
第24図	大神窯跡出土須恵器実測図(16)	30
第25図	大神窯跡出土須恵器実測図(17)	31
第26図	大神窯跡出土須恵器実測図(18)	32
第27図	大神窯跡出土須恵器実測図(19)	33
第28図	大神窯跡出土須恵器実測図(20)	34
第29図	大神窯跡出土須恵器実測図(21)	35
第30図	大神窯跡出土須恵器実測図(22)	36
第31図	大神窯跡出土須恵器実測図(23)	37
第32図	大神窯跡出土須恵器実測図(24)	38
第33図	大神窯跡出土須恵器実測図(25)	39
第34図	大神窯跡出土須恵器実測図(26)	40
第35図	大神窯跡出土須恵器実測図(27)	41
第36図	大神窯跡出土須恵器実測図(28)	42
第37図	大神窯跡出土須恵器実測図(29)	43
第38図	大神窯跡出土須恵器実測図(30)	44
第39図	大神窯跡出土須恵器実測図(31)	45
第40図	大神窯跡出土須恵器実測図(32)	46
第41図	大神窯跡出土須恵器実測図(33)	47
第42図	大神窯跡出土須恵器実測図(34)	49
第43図	大神窯跡出土須恵器実測図(35)	50
第44図	大神窯跡出土須恵器実測図(36)	51
第45図	大神窯跡出土須恵器実測図(37)	52
第46図	大神窯跡出土須恵器実測図(38)	53
第47図	大神窯跡出土須恵器実測図(39)	54
第48図	大神窯跡出土須恵器実測図(40)	56
第49図	大神窯跡出土須恵器実測図(41)	57
第50図	大神窯跡出土須恵器実測図(42)	58
第51図	大神窯跡出土須恵器実測図(43)	59
第52図	大神窯跡出土須恵器実測図(44)	60
第53図	大神窯跡出土須恵器実測図(45)	61
第54図	大神窯跡出土須恵器実測図(46)	62
第55図	大神窯跡出土須恵器実測図(47)	63
第56図	大神窯跡出土須恵器実測図(48)	64
第57図	大神窯跡出土須恵器実測図(49)	65
第58図	大神窯跡出土須恵器拓影図(1)	66
第59図	大神窯跡出土須恵器拓影図(2)	67
第60図	大神窯跡出土須恵器拓影図(3)	68
第61図	大神窯跡出土須恵器拓影図(4)	69
第62図	大神窯跡出土須恵器拓影図(5)	70
第63図	大神窯跡出土須恵器拓影図(6)	71

第64図 大神窯跡出土須恵器分類図（1）	72
第65図 大神窯跡出土須恵器分類図（2）	73
第66図 大神窯跡出土須恵器分類図（3）	74
第67図 大神窯跡焼成復元・須恵器分布図	84
第68図 大神窯跡重焼概念図	85
第69図 墓山窯跡群出土須恵器実測図	86
第70図 須恵器稟塊編年図	90
第71図 出羽南半の須恵器編年図	92

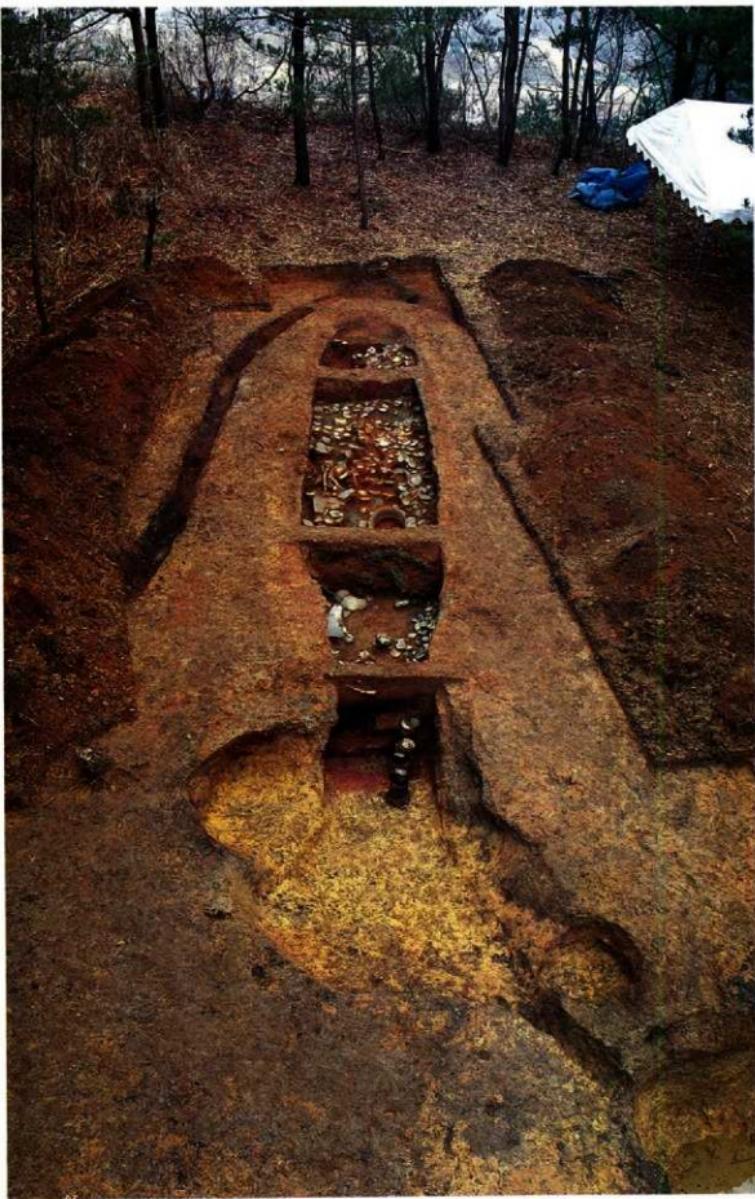
### 付 表 目 次

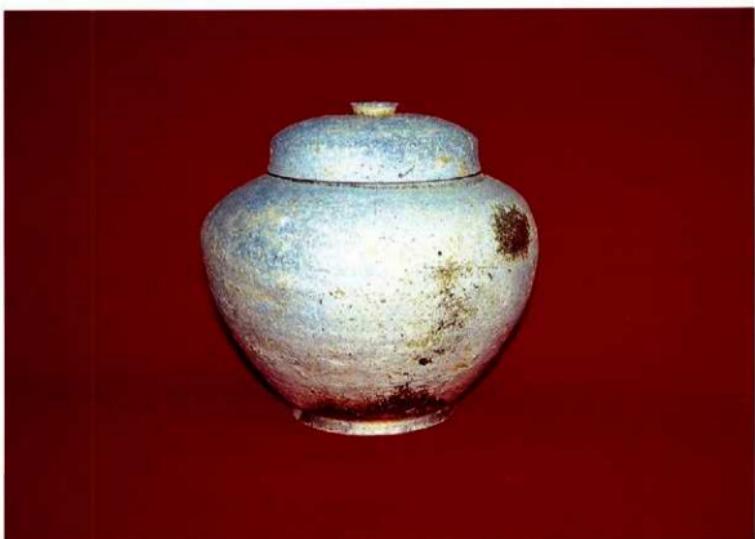
第1表 大神窯跡出土須恵器類別表	12
第2表 大神窯跡出土須恵器計測表	75
第3表 大神窯跡出土須恵器法量分類表	88
第4表 出羽南半の須恵器編年表	93

### 図 版 目 次

巻頭図版一 大神窯跡遺物出土状況	
巻頭図版二 大神窯跡出土遺物	
第一図版 大神窯跡の発掘（1）	
第二図版 大神窯跡の発掘（2）	
第三図版 大神窯跡の発掘（3）	
第四図版 大神窯跡の発掘（4）	
第五図版 大神窯跡の発掘（5）	
第六図版 大神窯跡出土の遺物（1）	
第七図版 大神窯跡出土の遺物（2）	
第八図版 大神窯跡出土の遺物（3）	
第九図版 大神窯跡出土の遺物（4）	
第十図版 大神窯跡出土の遺物（5）	
第十一図版 大神窯跡出土の遺物（6）	
第十二図版 大神窯跡出土の遺物（7）	
第十三図版 大神窯跡出土の遺物（8）	
第十四図版 大神窯跡出土の遺物（9）	
第十五図版 大神窯跡出土の遺物（10）	
第十六図版 大神窯跡出土の遺物（11）	
第十七図版 大神窯跡出土の遺物（12）	
第十八図版 大神窯跡出土の遺物（13）	
第十九図版 大神窯跡出土の遺物（14）	
第二十図版 大神窯跡出土の遺物（15）	
第二十一図版 大神窯跡出土の遺物（16）	
第二十二図版 大神窯跡出土の遺物（17）	
第二十三図版 大神窯跡出土の遺物（18）	
第二十四図版 大神窯跡出土の遺物（19）	

卷頭圖版一 大神窯跡調查全景





大神窟跡K Y出土藏骨器



大神窟跡出土須恵器群

## 1 遺跡の概要

大神塚跡は、米沢市大字下小菅字大神に所在する。市街地の北西部、川西町の境界と隣接する成島丘陵の山麓に位置し、JR米坂線中部駅から南西約1kmの通称「大神山」標高326.1mから南東に延びる穏やかな丘陵の谷合いで、小規模な沢を挟んだ北側の傾斜面に分布している。

本塚跡の一帯には、川西町の塙山塚跡群、同じく縄文時代の集落跡の虚空藏山遺跡の大規模な遺跡を始め、米沢市の下小菅遺跡、戸戸尻館跡、西方塚群、土性在家館跡など、古代から中世にかけての遺跡が成島丘陵の縁辺に沿って集中している。

特に注目されるのは塙山塚跡で、虚空藏山から突き出した舌状丘陵に沿って東西360m、南北420mの範囲に分布する須恵器の塚跡群で、昭和41年6月に当時、山形大学教授の柏倉亮吉氏によって調査を実施している。その内容を報告した中郡村史（1967年 長井政太郎）によれば、第1地点から第8地点の8箇所を調査し、うち5地点で窯の痕跡を確認している。中でも第1地点からは、全長11.2m、最大幅が2.2mの半地下式無段登窯を確認している。窯内部からは、須恵器の壺を中心として、蓋や甕片が検出されている。須恵器の壺の主体は壺の下半部に稜を発達させた所謂「稜塊」が多くみられる。また、壺類の切離技法の大半はヘラ切りが主流であるが、第6地点出土の壺類は糸切りが多く検出したと報告されている。その後、遺跡の存在する丘陵の大半は、田畠等の開拓によって破壊を受けている。

さて、大神塚跡の確認は、平成元年、米沢市教育委員会で委託している埋蔵文化財巡回調査員の水野哲氏から大字下小菅字大神の山麓の開墾の際に多量の須恵器を地元の島貫源太郎氏が採集しているとの情報を得たのに始まる。早速、同氏とともに出土品を実見したところ、須恵器の壺を中心にダンボール1箱分の遺物が保管されており、焼成不十分なものや変形を受けた製品が混入していることも判った。特に、須恵器の壺に「稜塊」が混入していることと、前述の塙山塚跡に隣接していることも注目された。

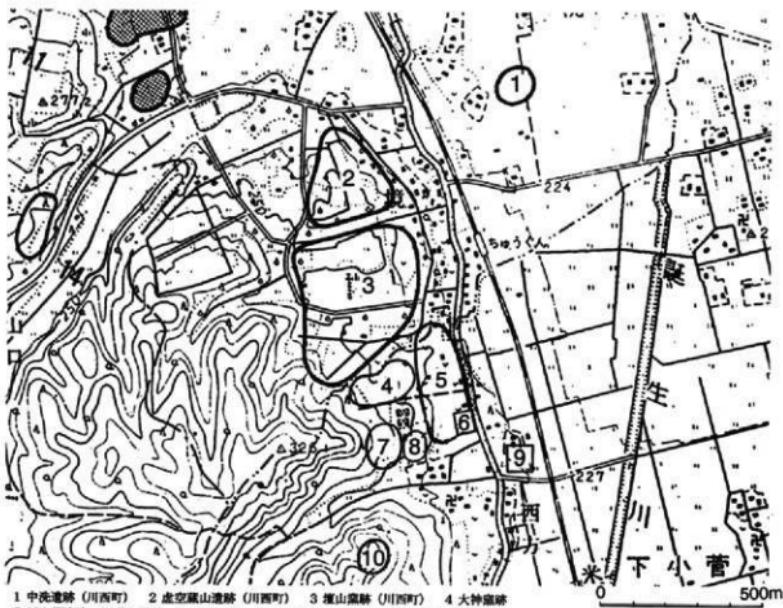
また、地元の地権者などによれば、遺跡の周辺の一帯は、戦後に重機などによって開拓されたところで、縄文時代の石器や奈良時代の須恵器などの破片や焼け土などが散乱していたこととの情報もあって、塙山塚跡群のような塚跡が存在していたものと判断される。現地を確認したところ新規の遺跡であることから、字名より大神塚跡と命名した。

ただし、中郡村史の報告によると、大神塚跡の存在する箇所は、柏倉氏が確認した第7地点の可能性がある。報告には、須恵器散布地で大型の甕片が多いとだけ記載されている。第2回参照。従って、本大神塚跡も広義の塙山塚跡群の範疇に含まれている可能性が高い。

## 2 調査の経過

今回の調査は、前述の塙山塚跡のように遺跡の大半が破壊を受けた例もあり、将来の開発等を考慮して、窯の有無の確認と規模や年代を解明することを前提に実施したものである。

調査は、平成5年10月1日から開始する。島貫氏が採集した地点を中心にAトレントを設定し、付近一帯のボーリング探査と並行し進めることにした。11月4日からは、Aトレントの西側と東側よりにかけた範囲に灰原と推測される遺物の集中箇所が検出されたことで、直行する



第1図 大神窯跡周辺の遺跡分布図

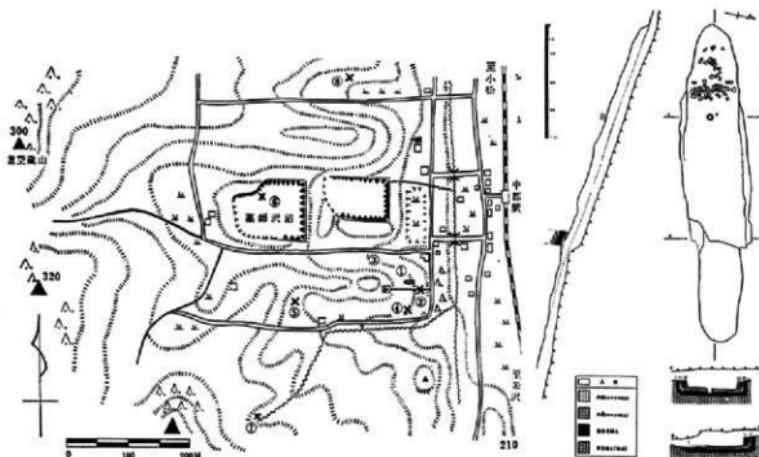
ようにも南北のBトレンチを設けて精査を行った。結果、窯跡と判断される赤褐色・青灰褐色に焼けた痕跡が認められた。

さらに、11月10日にはボーリング探査で焼土が認められたCトレンチを設定した範囲にも梢円形に焼けた痕跡を示す窯跡の存在を確認した。

2基の窯跡は、東側をBN1、西側をBN2と登録する一方、周辺一帯のボーリング探査と東側の斜面に1m×15mのDトレンチ及び西側のAトレンチをさらに西側に拡張して確認を行ったが新たな窯跡の痕跡を検出することはできなかった。その後、BN2の周囲には窯上部に配されたKY5の排水溝と灰原の東側に隣接してDY3とDY5の2基の土壙が付随していることが判明した。

11月17日からは、窯の位置に沿って8m×8mの基本クリットを設定するとともに、今回確認した2基の窯のうち、窯跡の形態を把握する目的から規模の小さいBN2を選出して調査を実施することにした。BN2の窯跡内の土層確認用のベルトは、主軸長に沿って縦に灰原までを1本、さらに、主軸方向に対し直角に炊口付近煙道付近から焼成部、燃焼部、炊口付近と各1本のベルトを配し、それぞれに1区～3区と区分した。

11月18日からは、窯の掘り下げを行う。土色変色の状況から既に窯本体は、削平されている



第2図 塙山窯跡群の分布・第1地点の窯平面図

ものと判断していたが、焼成段階で天井が没落し、製品が当時の状況で存在することが判った。従って、遺物を記録しながら慎重に掘進めることになり、予想以上の成果をあげることが出来た。11月20日からは、BN2の窯体と並行し、灰原・排水溝・土壌の順で掘り下げを進め、順次写真撮影、平面図作成を行い、11月30日に現地説明会を開催して終了した。

今回の最終的な精査面積は、335m<sup>2</sup>であった。

### 3 窯の分布【第3図】

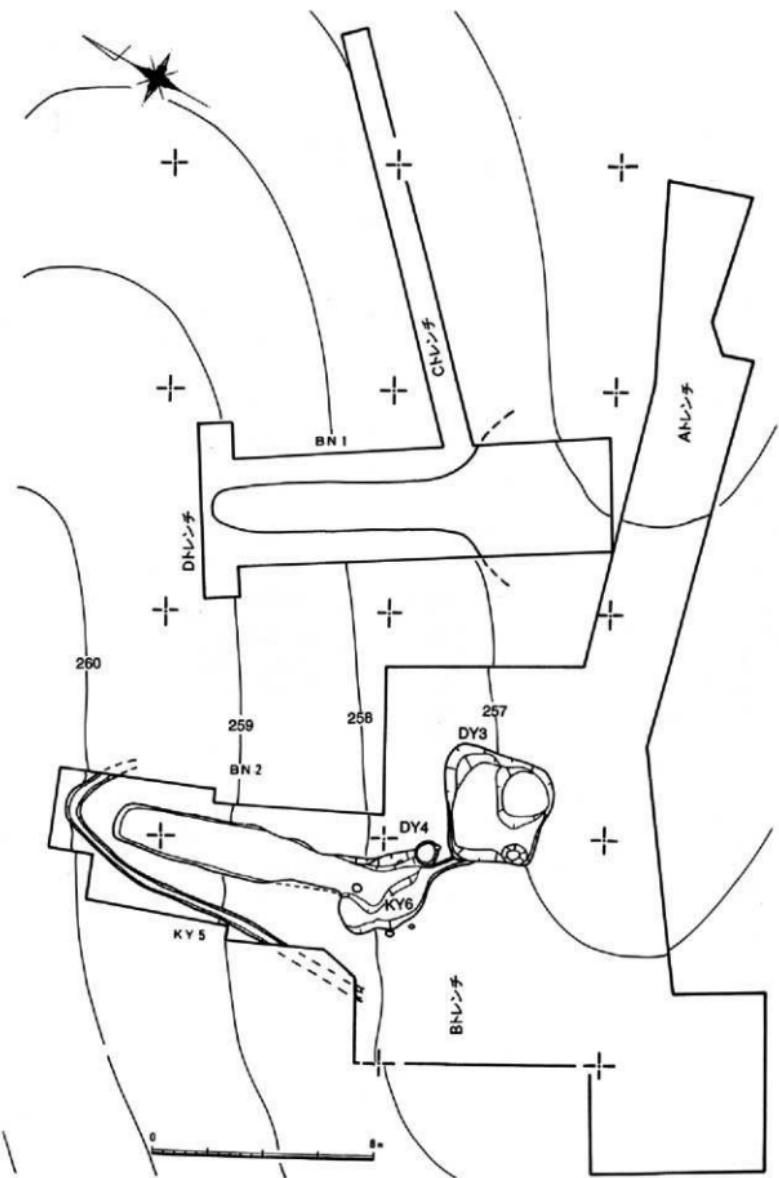
須恵器が点在する約10,000m<sup>2</sup>を対象にボーリング探査とトレンチ調査で確認した須恵器生産の窯跡は、小さな沢を挟んで北東斜面の2基であった。他には具体的な窯跡の痕跡が認められないことから大神窯跡は2基のみであった公算が強い。

### 4 検出遺構

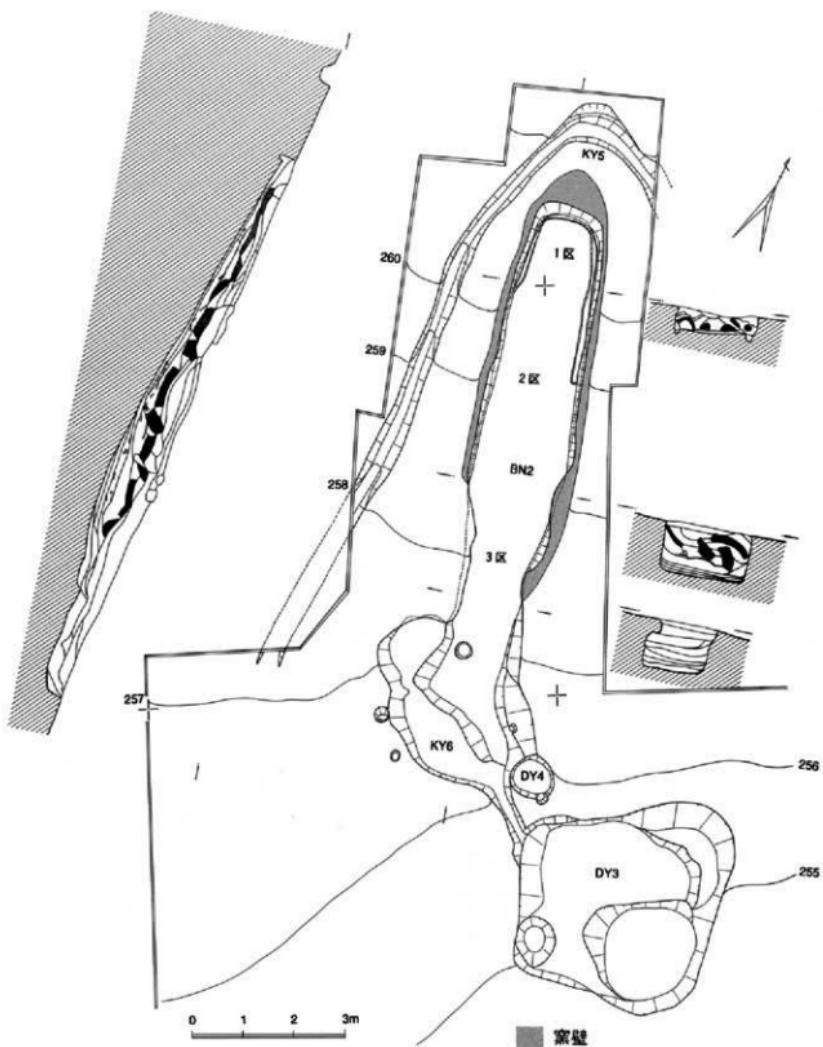
今回の調査での遺構は、2基の須恵器登窯を始めBN2に伴う土壌2基、排水溝1基が検出されている。中でも2基の窯跡は、調査状況から半地下式無段登窯に分類される。調査はBN2を選出したものであったが、基本的にはBN1も同形態と推測される。ここでは調査を実施したBN2を中心に概要を記す。

#### 1) BN1【第3図、第1図版】

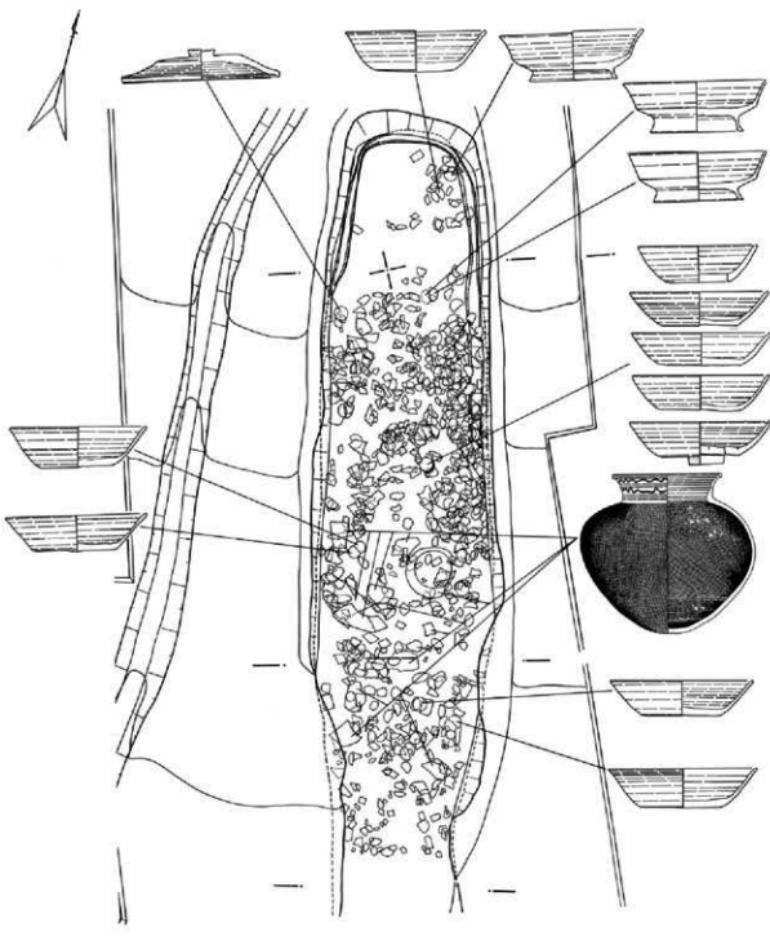
Bトレンチで確認された窯跡で、調査を実施していないことから平面プランのみである。窯壁の粘土貼付と焼成土色変化の範囲より、主軸長が約12m、幅が1.5m～1.8mをなすものと推測される。ボーリングによる確認によれば、焼成部・燃焼部が約50cm前後、炊口部が約60cm、



第3図 大神塚跡調査全体図



第4図 大神墓跡BN2平面図



第5図 大神塚跡BN2遺物出土平面図

灰原が95cmと深くなっていることからBN2と同様に灰原が深く埋込まれているものと考えられる。遺物は灰原の確認面で須恵器の壺片を中心に51点が検出された。

## 2) BN2 [第3図～第5図、第1図版～第4図版]

### ・窯の平面形状

窯の形状は、山芋状の中央がふくらみ炊口がすぼまる形態となっており、青褐色に還元を受けた壁の痕跡とその周囲に15cm～30cmの範囲で赤褐色に焼けた跡が明瞭に観察される。窯には、窯体と灰原、さらに方形形状の土壤が付随している。

### ・窯体の規模

窯の主軸長は、上部から炊口までが8.2mをなし、長さ3.2mの灰原を含めると全長の大きさは11.4mの規模となる。窯体の幅は、煙道付近で幅1.4m、確認面から底部までの深さが36cm～40cm、焼成部が幅1.6m～1.8m、深さ60cm～64cm、燃焼部の最大幅が1.9m、深さ60cm～80cmとなり、燃焼部から炊口にかけて急速にすぼまって、炊口が1.1m～1.3m、深さが95cm～111cmをなしている。

### ・底面構造

底面は無段築成で、上部に排水用の周溝が存在する。斜度は、全体的になだらかに推移するが、焼成部の手前から燃焼部にかけてやや勾配が強まり、炊口から灰原にかけて緩やかに湾曲する断面をもつ。窯体の平均的な傾斜角度は約9°強であった。窯奥壁直下から焼成部にかけて確認された周溝は、幅15cm、深さ15cm～25cmで、東側が1.8mほど長く延びている。

### ・壁の状況

壁の状況は、約20cm～25cmの壁厚を有し、還元を受けているために須恵器と同様に青灰褐色に変色している。壁表面には、壁を貼付た際の指の痕跡と灰が付着して融解した暗緑褐色の自然釉が焼成部に顕著に残っている。また、壁の断面観察では3枚の再調整を行っていたことも判明した。壁の素材には主体となる粘土に多量の「スサ」と砂を混合したものを用い、中心には天井の構築材に用いられた1.5cm前後の細木が10cm前後の間隔で検出されている。

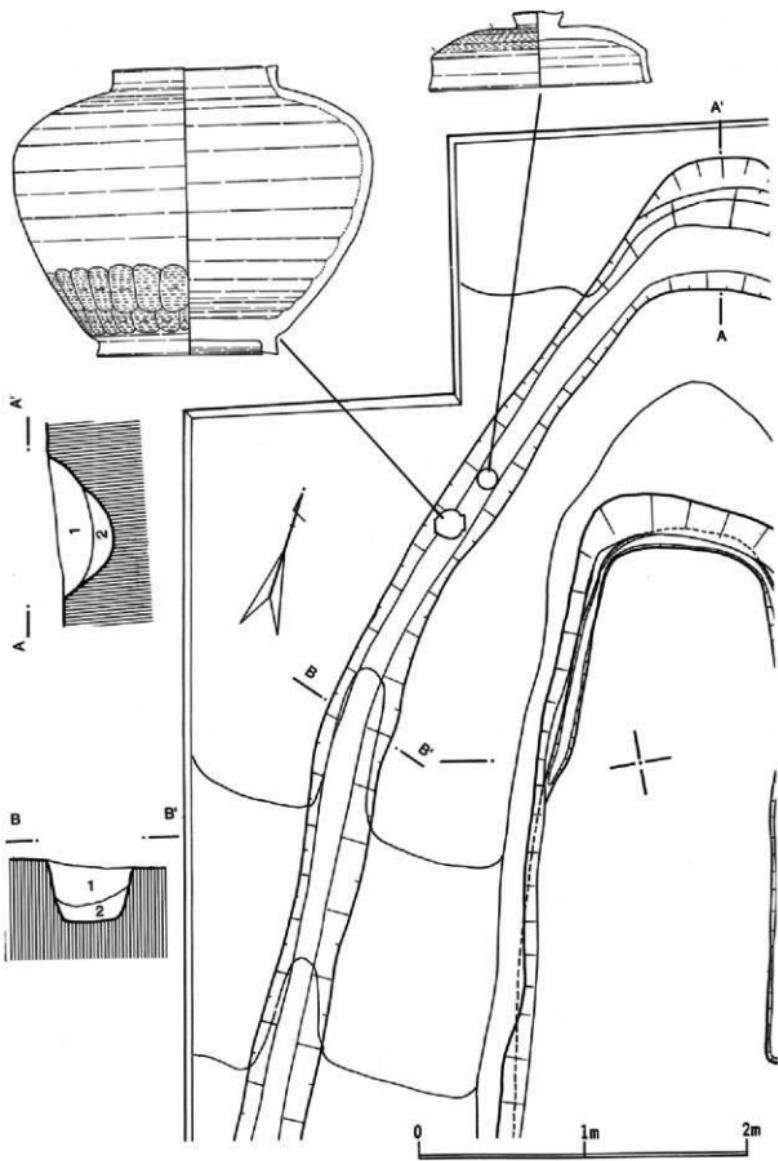
### ・灰原

BN2の炊口から東側は垂直に約3m進み、西側は大きく弧を描くように湾状に張り出しており、主軸方向で3.4m、深さ50cm～80cmを測る。また、西側を沿うように30cm～1.3mの不整形に埋込まれたKY6の溝が設置され、細まった先端部はDY3に接続している。窯の排水を処理するものと推測される。灰原内に含まれる遺物は、須恵器の壺と須恵器壺の破片が大半で、4,238点が検出されている。

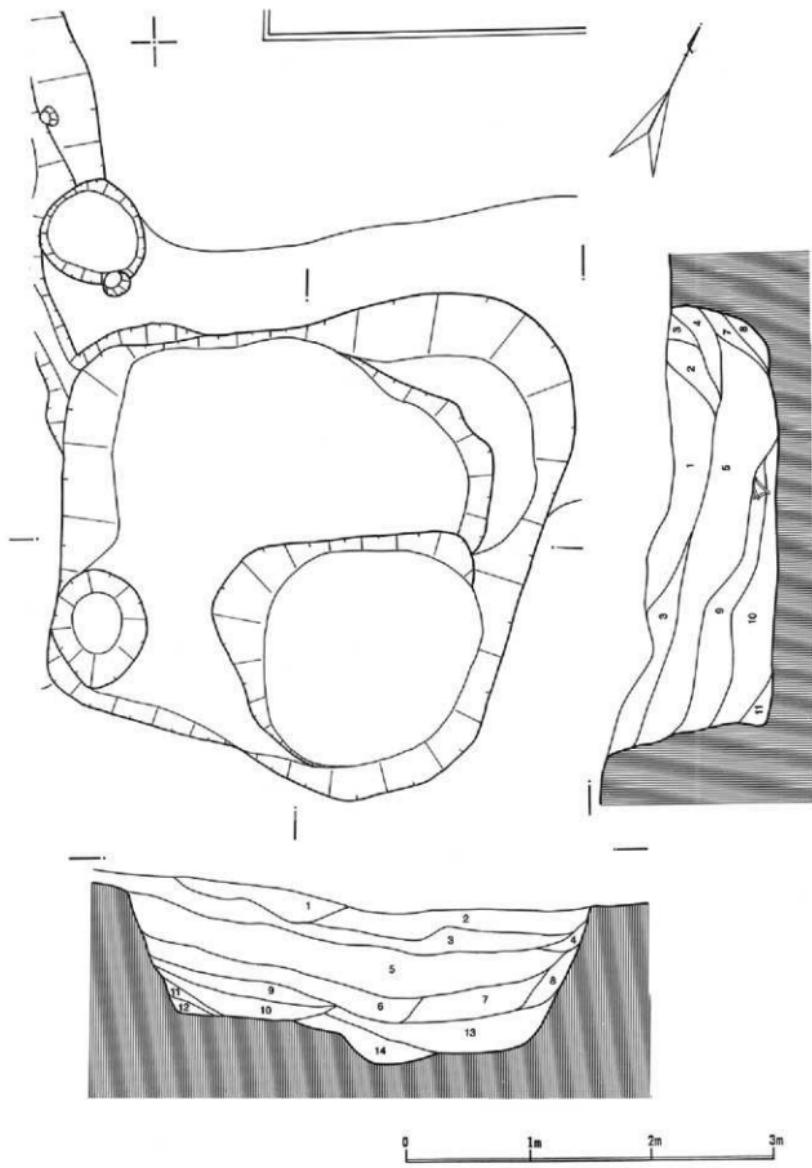
### ・窯の堆積

窯内部の堆積をみると、多量の製品を覆うように天井部の壁土がアーチ状に認められている。天井部は、1区・2区の断面をみる限りでは、西側の天井壁に東側の天井壁が重なって確認されることにより、西側より崩壊したことが推測される。

### ・検出遺物



第6図 大神廟跡KY 5平面図



第7図 大神窯跡DY3平面図

B N 2 の内部から検出した遺物は、接合復元した個体数を列挙すると須恵器高台壺「稜塊」71点、須恵器壺122点、須恵器蓋108点に須恵器大甕1点、壺3点を加えた308点となる。さらに復元不可能な破片と焼台に転用した甕・壺の破片らが2,040点で計2,348点が認められている。これらの完全に近い製品は、焼成部の東壁寄りにまとまって重ね焼き状況で検出されたのに対し、西側寄りの製品は北側の煙道付近と南の燃焼部付近に散乱している。

特にはば完形に近い308点の須恵器の多くは、製品が完全に還元が終了していることと、壺や蓋の全てが中央から左右に破損を受け、急激な収縮を受けた影響で接合面に隙間が生じてある。このことは、焼成終了後の還元段階で、窯の天井が突然崩壊したことを物語っている。

しかも、焼成部の西側寄りの製品が上下に飛ばされている状況は、明らかに窯が光熱を保っている段階で、焼成部の西天井壁が崩壊したのに伴って、小規模な水蒸気爆発を誘発したものと推測される。

### 3) KY 5 〔第3図、第6図、第5図版〕

B N 2 の排水を目的に周囲に配された溝跡で、窯跡を囲むように存在し、西側は灰原付近まで伸び、自然に消滅する。東側の溝に関しては、立ち木のため途中の段階で確認を断念したがボーリング探査では燃焼部までは確認される。溝の幅は35cm~48cm、深さ20cm~30cmを測り西側の煙道付近の溝底部より完形の藏骨器が埋納していた。こういった例は他にないもので、奈良時代の藏骨器の発見も県内では最古となるものである。

### 4) DY 4 〔第3図〕

B N 2 の灰原とDY 3 に接して存在している。ほぼ円形のプランを示し、長径88cm、短径80cm、深さ40cmの浅い掘込みをもつ、内部からは須恵器大甕の破片を中心に 116点の須恵器片が検出されている。B N 2 の灰原に伴う遺構と考えられる。

### 5) KY 3 〔第3図、第7図、第5図版〕

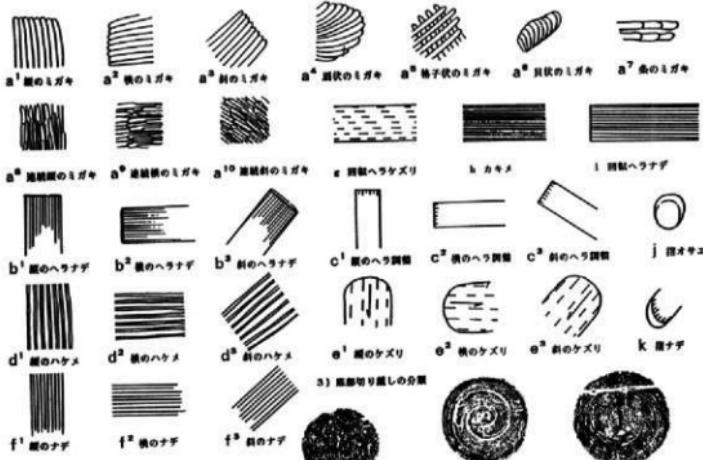
B N 2 の灰原に接して存在するもので、灰原から延びるKY 6 の溝が北西隅の土壤内に接続されている。土壤の形状は、不整な方形を示す南北 4.28m、東西4.1m、深さ1.2m~1.4mを測る。堆積層は14枚で、ほぼ交互に多量の炭化物と遺物が認められた。

特に5層以下には第53図-429や第57図-466等を代表するE群土器の須恵器壺とG群土器の須恵器甕を中心に1,200点が検出されている。

## 5 検出遺物

今回の大神窯跡から検出された遺物は、調査を実施したB N 2を中心として 7,567点の須恵器が出土している。特に、B N 2 の窯内部には 308点の完形に近い製品が突然の窯の崩壊によって当時の窯詰状況で検出されたことは、この当時の須恵器生産を考える上で、極めて重要な資料を提供したといえる。また、灰原と土壤内部の遺物は、少なくともB N 2 が崩壊した以前

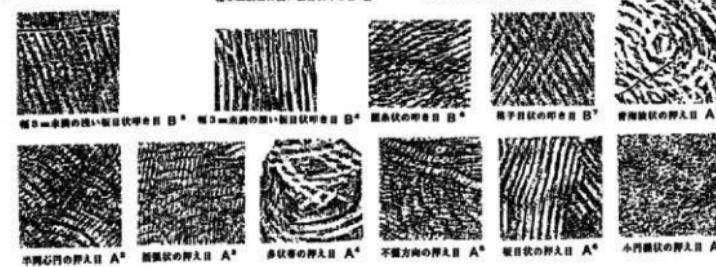
1) 土器側面の分類



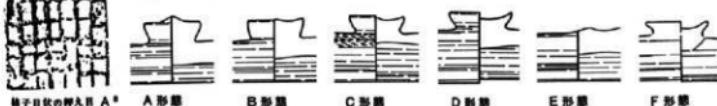
2) クロコ形態の分類



3) 印き目・押え目の分類



5) ツマミ形態の分類



第8図 土器調整手法分類図

に焼かれた製品の一部で、ごく近い時期の年代的な相違を判断する資料としての価値がある。

さて、これから紹介する資料は、BN2の全ての製品と灰原・土壤・構内部から検出された遺物のうち図化の可能であった202点を含めた計510点を対象とした。各遺構出土の総数は次の様になる。

第1表 須恵器出土別類計表

注( )は完形品を含む固化点数

出土地区	焼台類	稜塊類	壺類	蓋類	壺形類	鉢形類	甕形類	小形
BN1					11		40	51
BN2	(1)	222(71)	894(122)	278(108)	153(3)		583(3)	2,040(308)
灰原	120(13)	42(15)	1040(15)	272(3)	856(19)	8(3)	1755(37)	4,133(105)
DY3	31(16)	13(3)	155(12)	54(3)	181(10)	4(3)	680(35)	1,118(82)
DY4	5(5)		20	1	15		68(2)	109(7)
KY5			31	2(1)	21(1)		49(2)	103(4)
その他		6			2		5	13
合計	156(35)	283(85)	2050(149)	607(115)	1279(33)	12(6)	3180(83)	7,567(510)

これら出土した須恵器群は、器形の形態から基本的に7群、細部の観察を加えると93類に分類することが可能であった。しかしながら、限られた紙数の都合もあって十分な説明をつけ加えることが困難なことから、その概要を記載するに留めざるを得なかった。よって、第8図に土器調整手法分類図・今回の報告で図化した全ての遺物の計測とその計測値、調整手法を集約した第2表の大神窯跡出土須恵器計測表・第3表に大神窯跡出土須恵器法量分類表を付け加えておいた。詳細については各図表を参照願いたい。

以下、簡単に分類した須恵器について説明を記す。

### 1) A群土器『第9図-1~11~第12図-31~35、第6図版1~35』

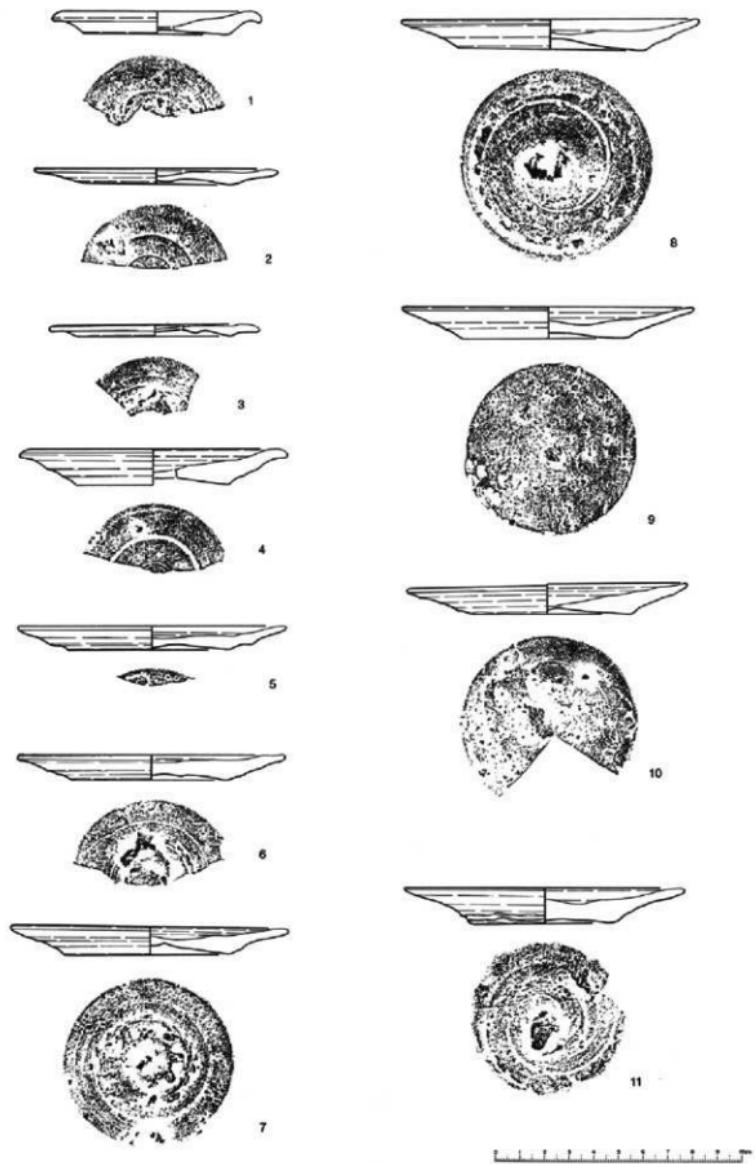
焼台に分類される遺物を一括したものである。この仲間には、BN2から1点、灰原が133点、DY3が47点、DY4が10点の計191点がある。うち、35点図化した。底部切離しは第12図-32の回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整を除けば、全て回転ヘラ切り無調整である。本群土器を特徴的に分類すると次の様になる。

皿状を示すA群1類~A群4<sup>1</sup>類・A群4<sup>2</sup>類の5類と蓋的な機能を有するA群5<sup>1</sup>類・A群5<sup>2</sup>類の2類。

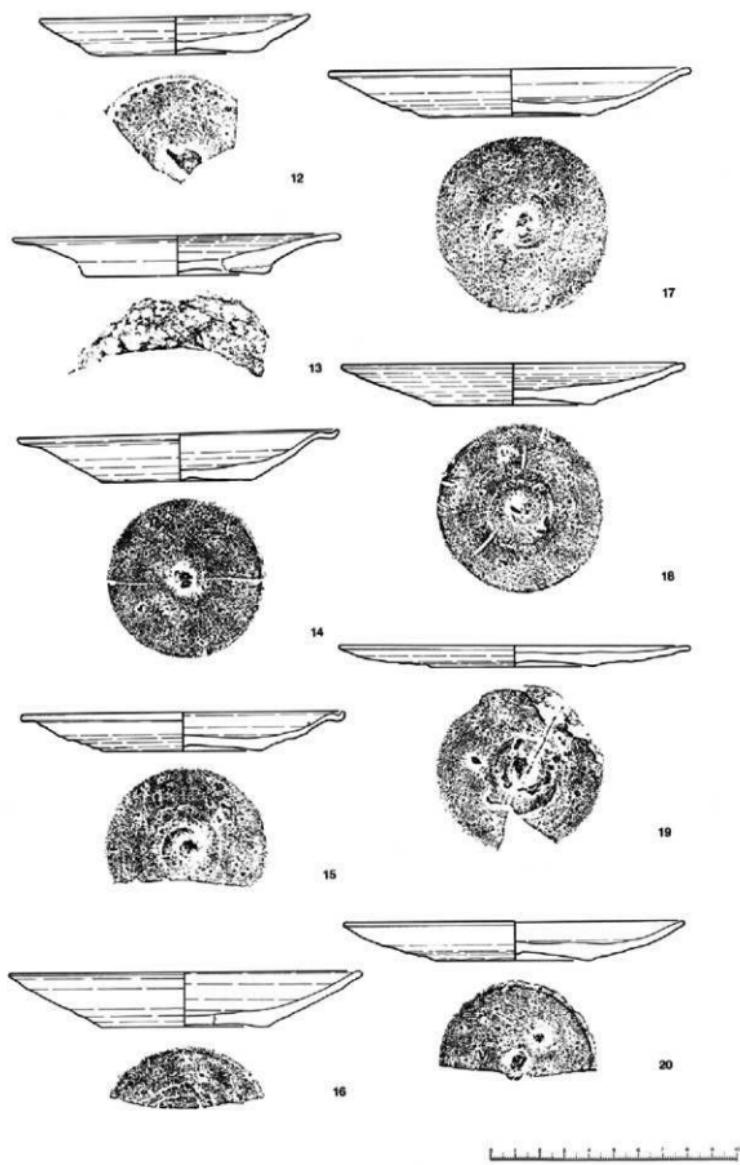
長頸壺の焼台として使用するA群6<sup>1</sup>類~A群6<sup>4</sup>類の4類の計11類に细分した。この中で1類~5類の焼台に関しては山形県内の遺跡からは出土例はないが、福島県会津若松市の大戸窯跡群に類例がある。

### 2) B群土器『第12図-36~38~第22図117~124、第6図版38~41~第11図版-100~124』

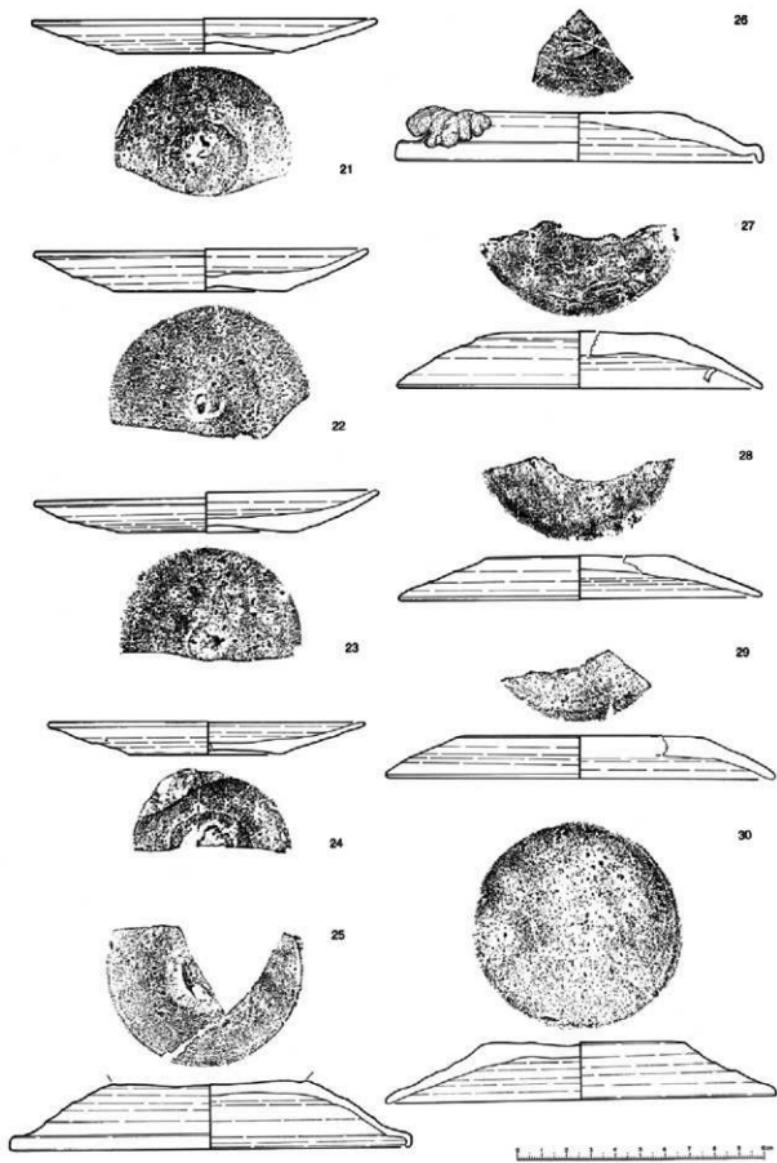
高台壺の稜塊の仲間を一括した。この仲間には、BN2から71点、灰原が15点、DY3が3点の計89点の完形資料と他に283点の須恵器稜塊の破片がある。底部切離しは第16図-70の回転ヘラ切り手持ちヘラケズリ調整と第22図-122の回転ヘラ切り回転ヘラケズリ調整を除けば、



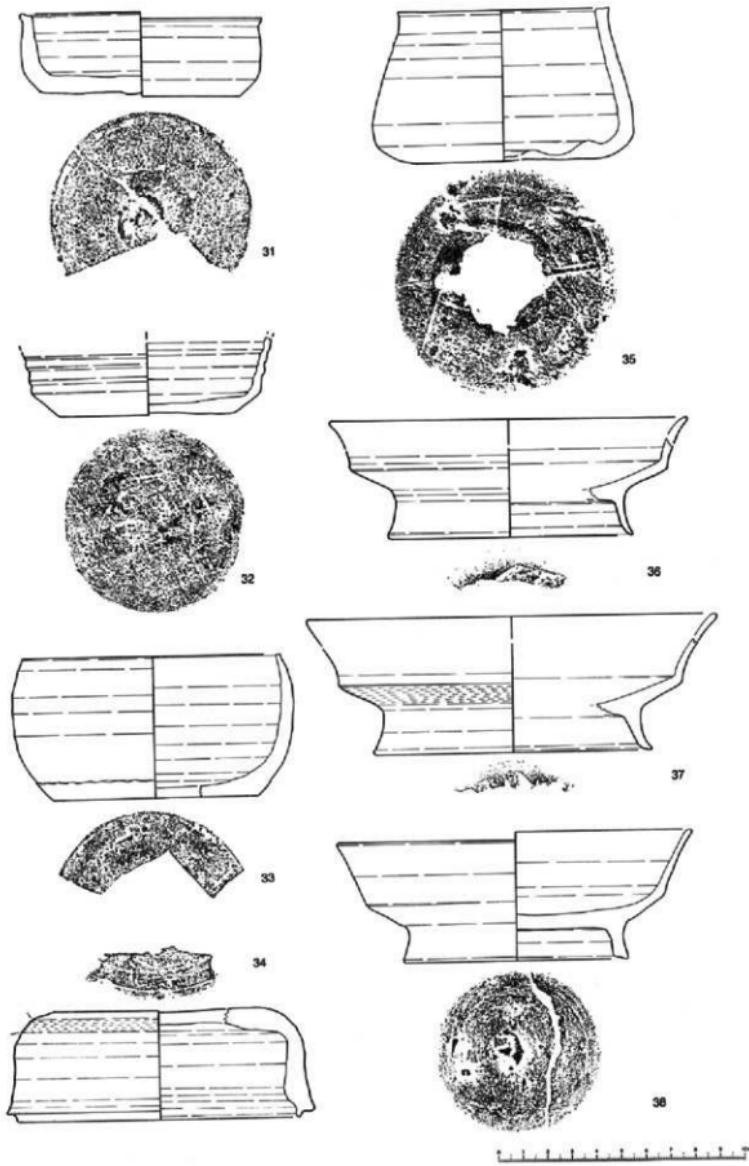
第9図 大神窟跡出土須恵器実測図(1)



第10図 大神窟跡出土須烹器実測図(2)



第11図 大神窟跡出土須恵器実測図(3)



第12図 大神窯跡出土須恵器実測図(4)

全て回転ヘラ切り無調整である。

本群土器を特徴的に分類し、次の計15類に細別した。

・B群1<sup>1</sup>類—胴部の中心に稜を置き、回転ヘラケズリで稜線を調整し、高台が比較的長身で細身の特徴をもつもの。

・B群1<sup>2</sup>類—厚みの高台部が外に開くもの。

・B群2<sup>1</sup>類—稜線が下胴部に垂下し、薄みの高台が外反りしながら開くもの。

・B群2<sup>2</sup>類—高台が湾状に開くのを特徴とするもの。

・B群2<sup>3</sup>類—厚みの高台が直角に付くのを特徴とするもの。

・B群3<sup>1</sup>類—基本的に2類と同じであるが、高台が低く外に緩やかに開くもの。

・B群3<sup>2</sup>類—高台が強く開き気味のもの。

・B群3<sup>3</sup>類—内湾気味に開くのを特徴とするもの。

・B群3<sup>4</sup>類—緩やかに高台が開く底唇部が凹みを有するもの。

・B群3<sup>5</sup>類—緩やかに高台が開く底唇部が凹みを有し、底唇部が外反するもの。

・B群4類—極端に低い器形を有し、低い高台が外反するもので、稜線に回転ヘラケズリを一部にもつもの。

・B群5類—稜の位置が胴部全体の3分の1と下部に位置し、発達も弱い小型もの。

・B群6類—4類と基本的に同様な器形を示すが、双耳を有するもの。

・B群7<sup>1</sup>類—稜の位置が胴部全体の3分の1と下部に位置し、高台が低く、稜が未発達もの。

・B群7<sup>2</sup>類—稜をもたない長身器高の壺で下胴部を丁重に回転ヘラケズリを施したもの。

・B群8類—一本群に属する稜塊類の形態が不明瞭なものを一括した。

この中でB群1<sup>1</sup>類とB群4類に関しては、全て灰原及びDY3の出土であり、稜の位置が器高的中央に置く1<sup>1</sup>類の特徴は稜塊のⅢ段階の仲間に多い。器高が低く、器厚高台の4類は稜塊のⅡ段階の特徴を示している。これらの土器は、米沢市の笠原遺跡・上浅川遺跡・大浦B遺跡・荒川2遺跡・川西町道伝遺跡と塙山窯跡群から出土している。

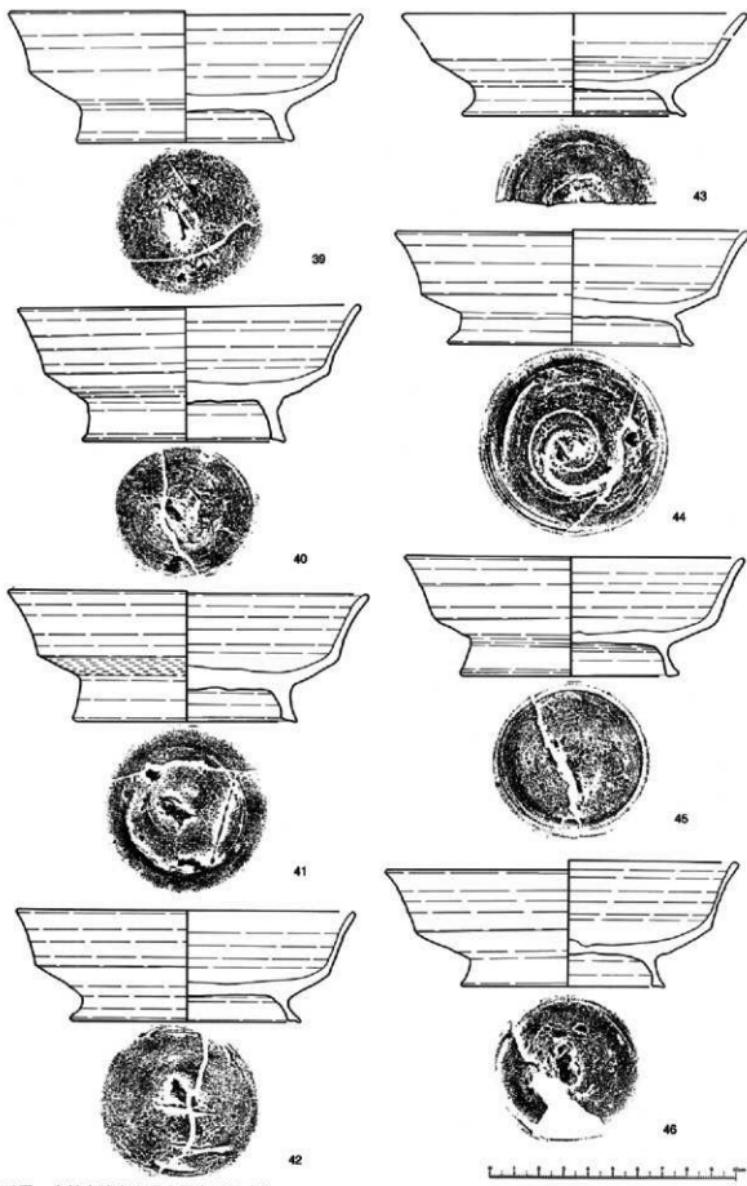
また、稜線の未発達のB群7<sup>1</sup>類も灰原出土のものであり、稜塊のⅢ段階後半の特徴を示している。米沢では上浅川遺跡と大浦B遺跡に類例がある。

B群4類・7<sup>1</sup>類・同7<sup>2</sup>類を除く他は全て稜塊のIV段階の仲間に相当し、BN2の焼成の一時的な年代を示すといえる。つまり、稜塊の特徴からのBN2の一括資料は大浦編年のⅢ期に相当し、8世紀末の年代を与えるのが妥当といえる。

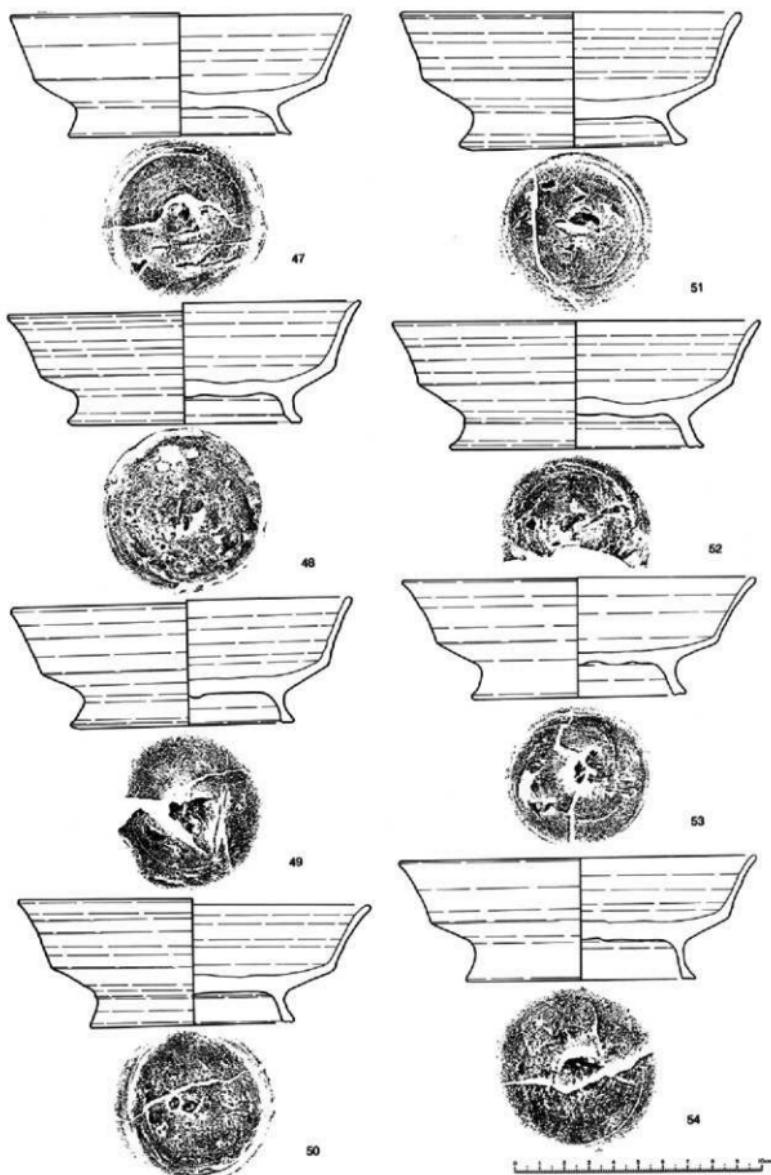
一方、灰原出土の回転ヘラケズリの調整をもつ稜塊は、大浦編年のⅡ期の特徴を指し、8世紀の後半から末葉の時期と推測される。大浦B遺跡で検出した稜塊の大半がB群7<sup>1</sup>類と一致していることは大神窯跡の初期生産時、もしくは、塙山窯跡群の可能性がある。なお、双耳を有するB群6類は大浦B遺跡と同形態であり、大神窯跡の公算が強い。

### 3) C群土器〔第23図～第41図、第11図版126～136～第16図版－227～254〕

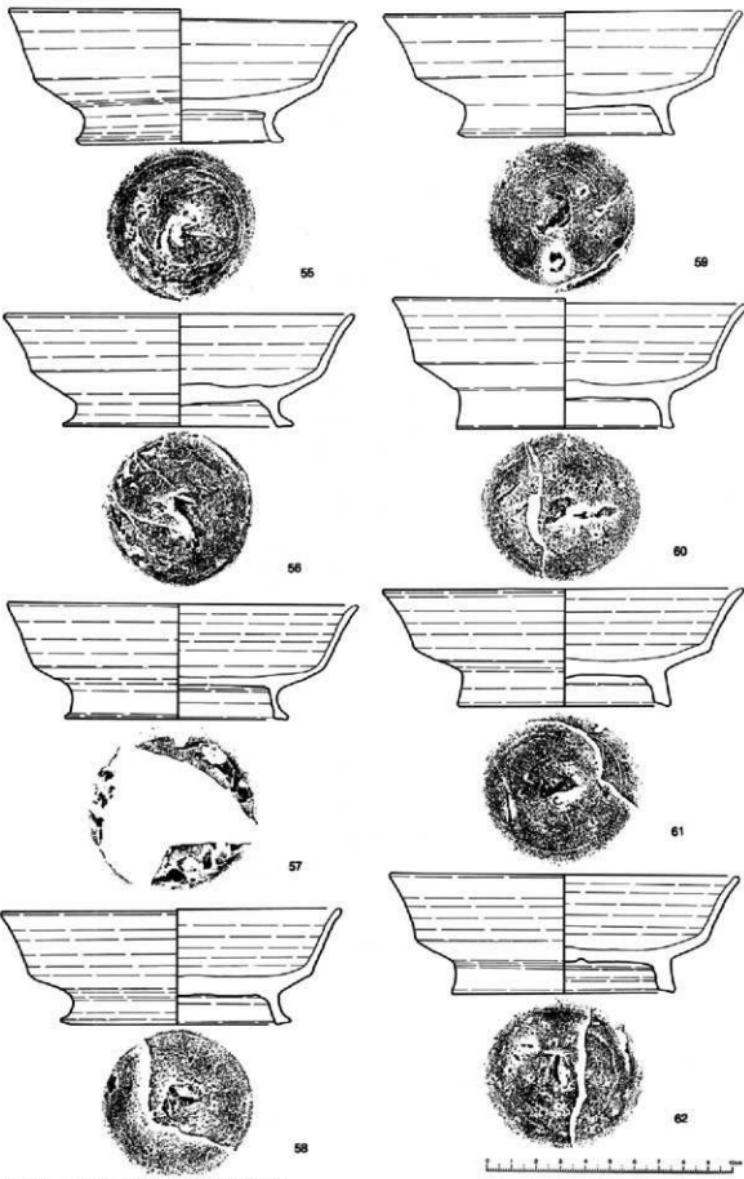
須恵器壺類を一括した。この仲間には、BN2から122点、灰原が15点、DY3が12点の計



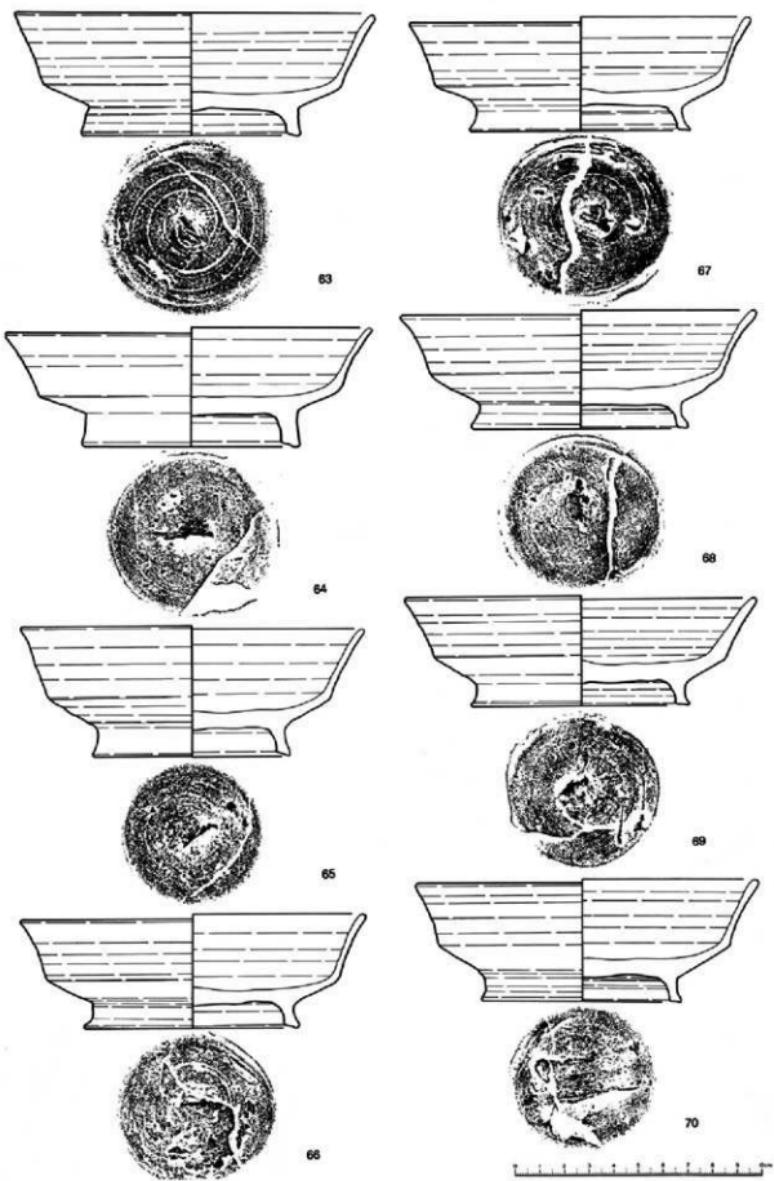
第13図 大神窟跡出土須恵器実測図 (5)



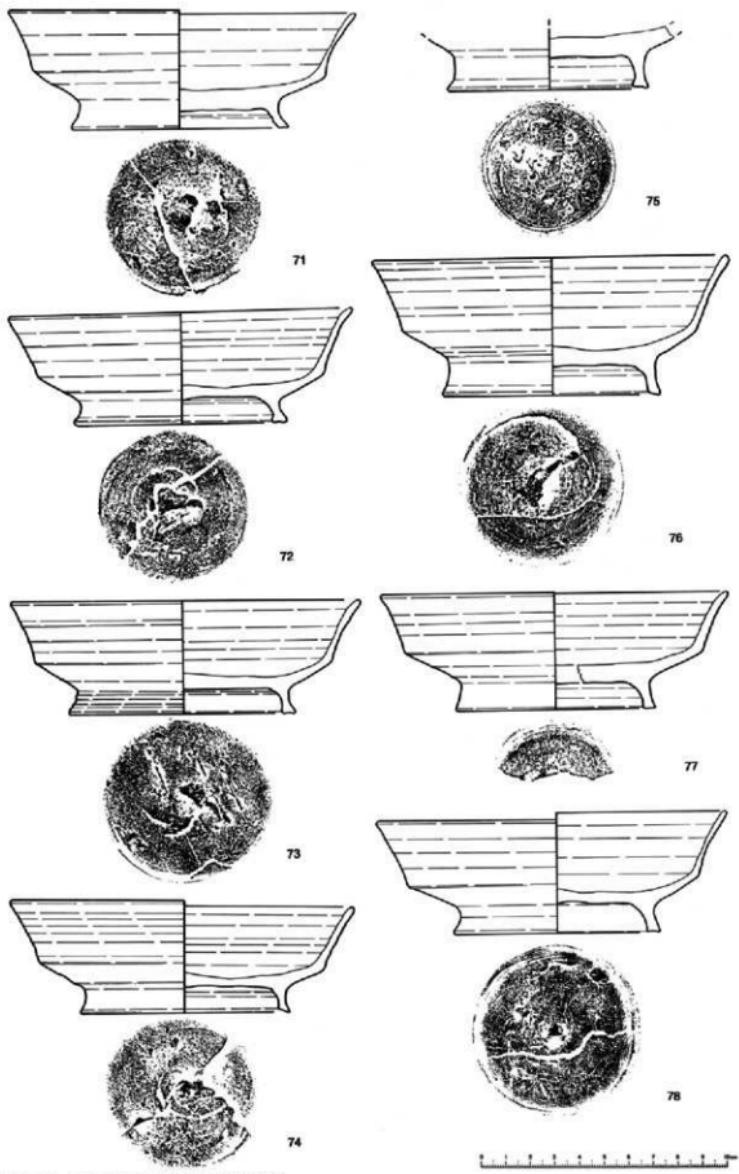
第14図 大神窟跡出土須恵器実測図 (6)



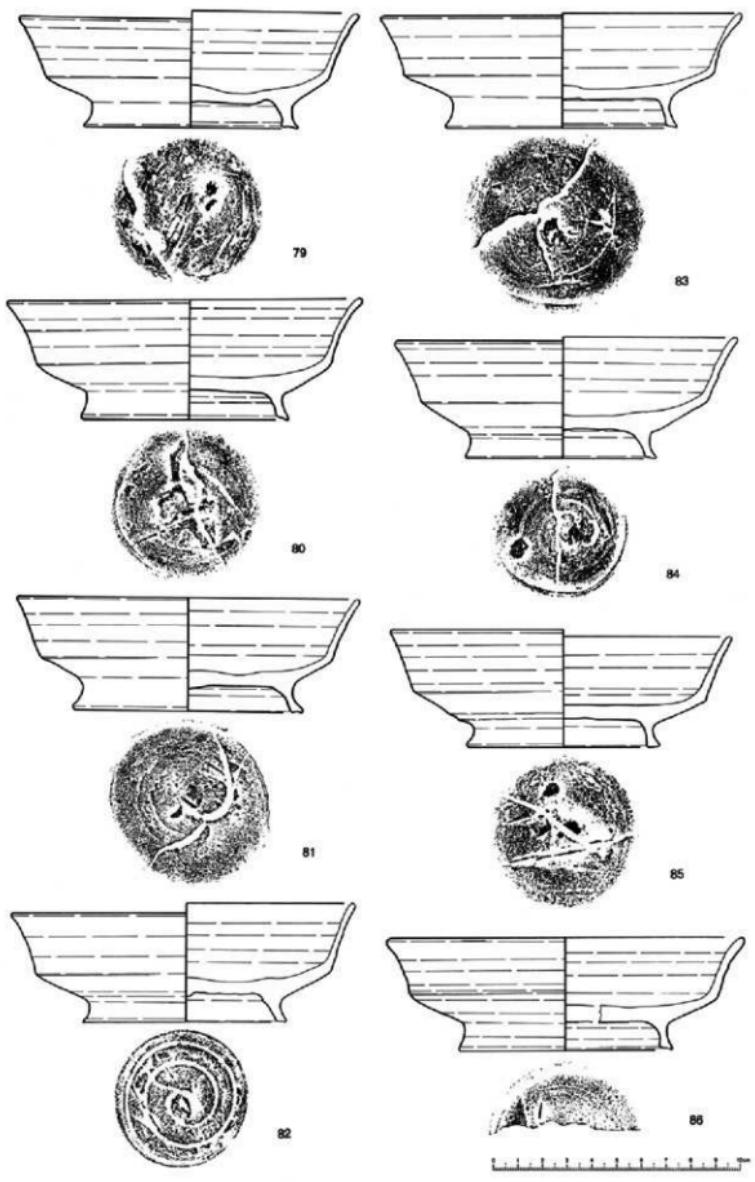
第15図 大神麻跡出土須恵器実測図(7)



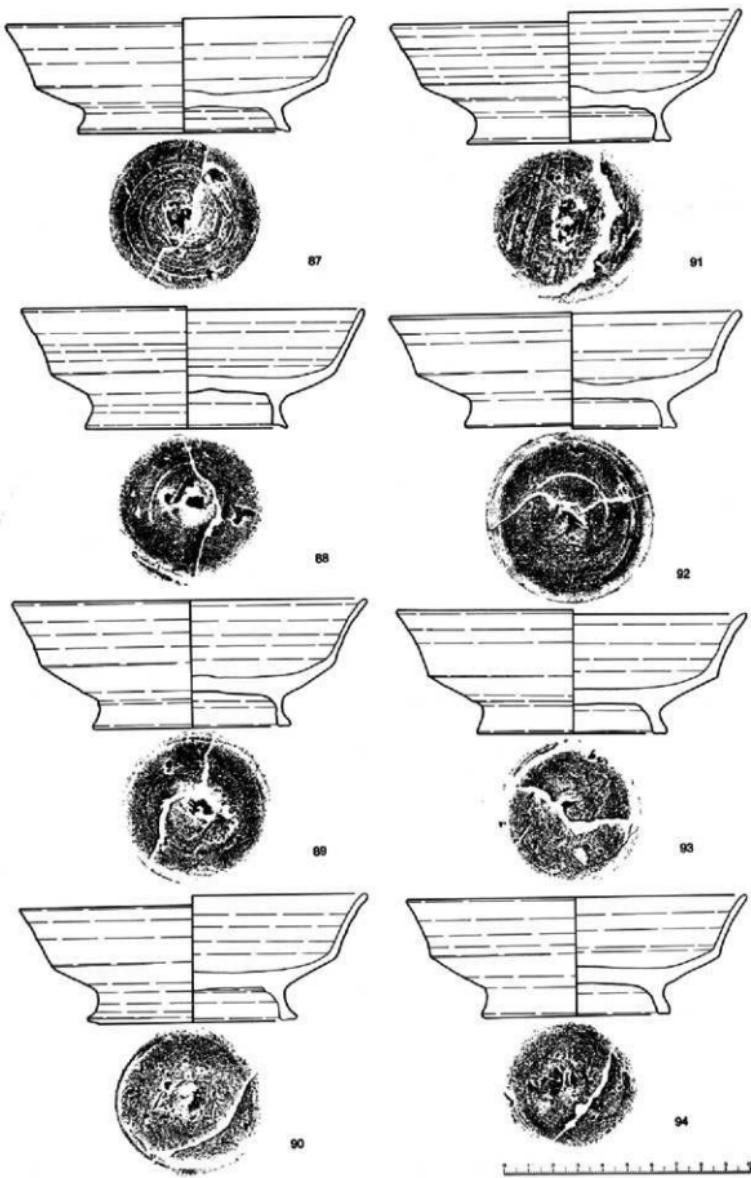
第16図 大神窟跡出土須恵器実測図(6)



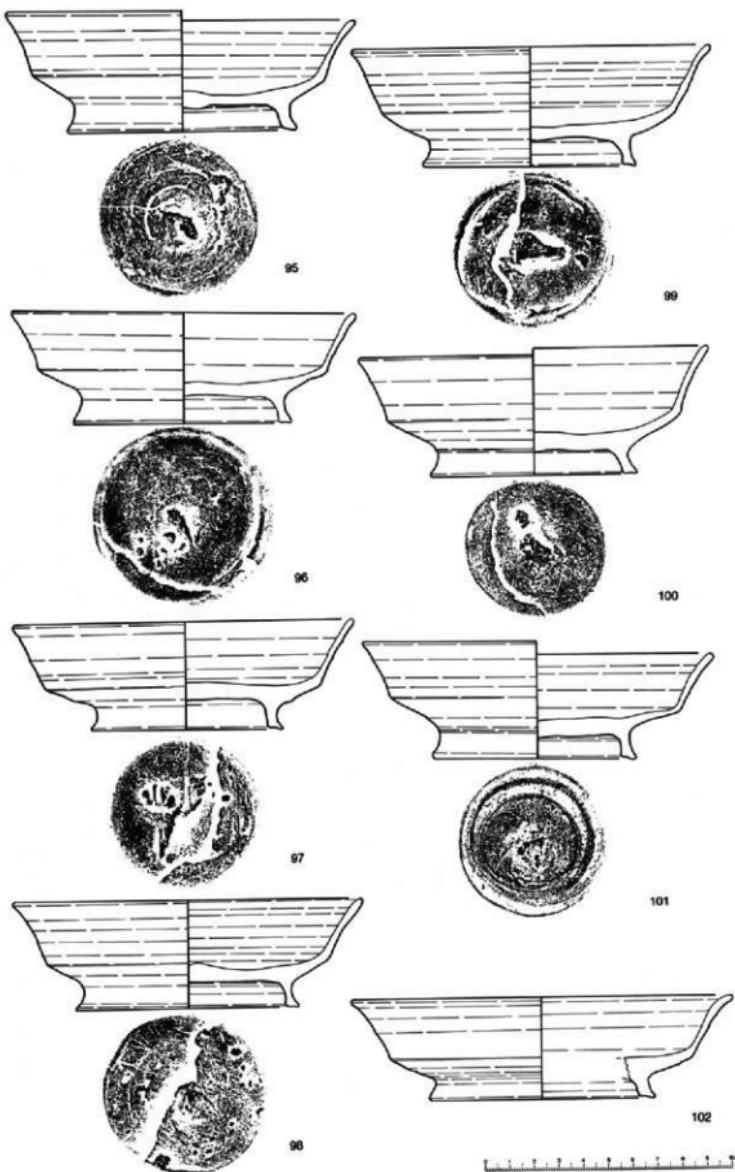
第17図 大神墓跡出土須恵器実測図 (9)



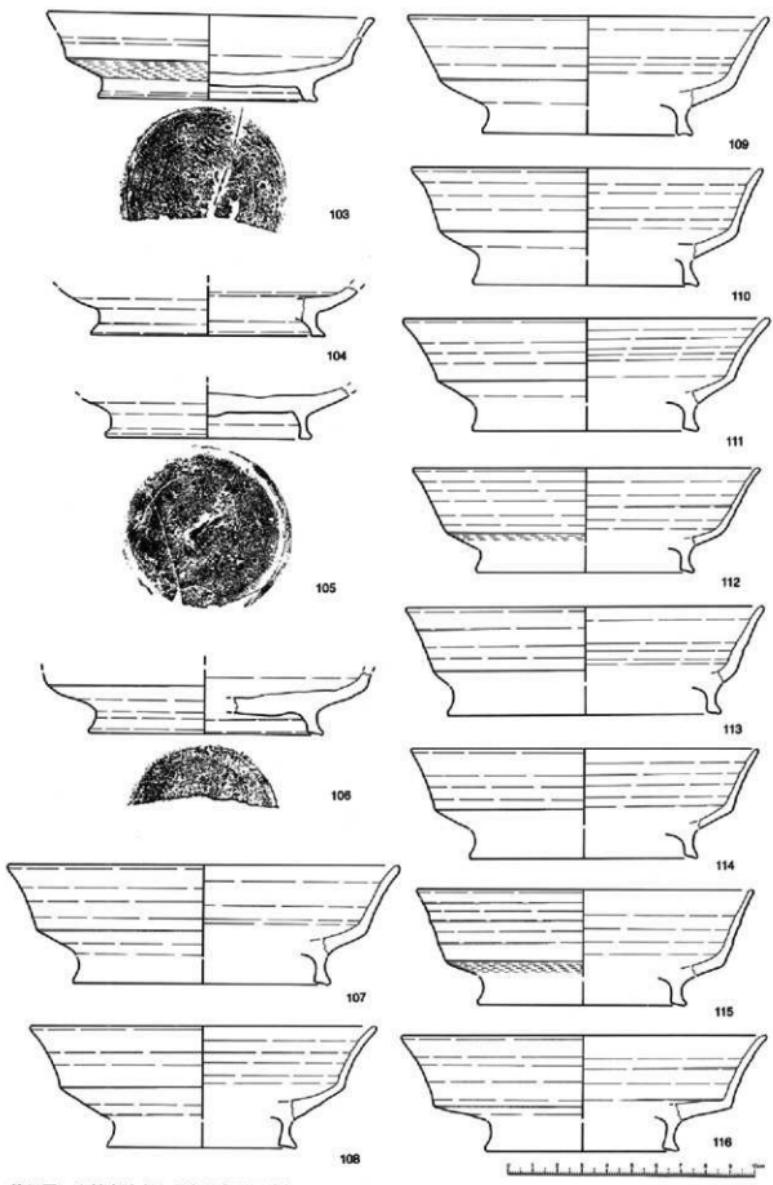
第18図 大神窟跡出土須恵器実測図 ⑩



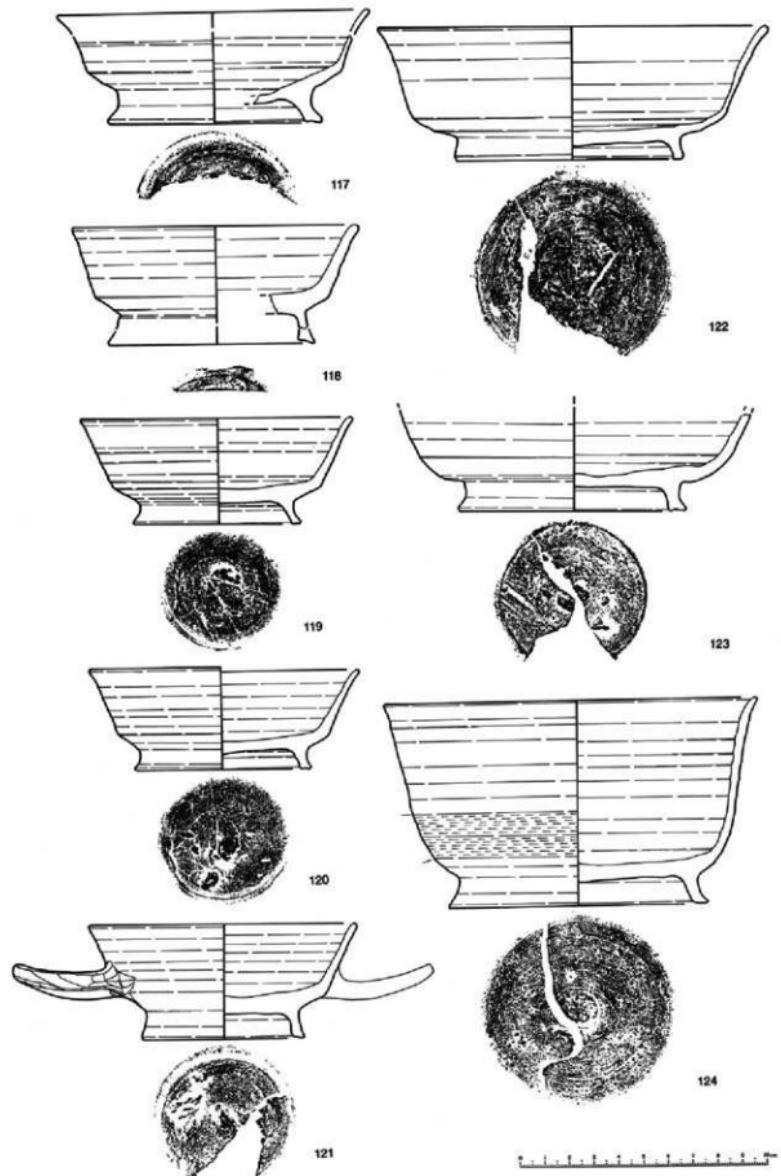
第19図 大神窟跡出土須恵器実測図 (II)



第20図 大神墓跡出土須恵器実測図 ②



第21図 大神窟跡出土須恵器実測図 13



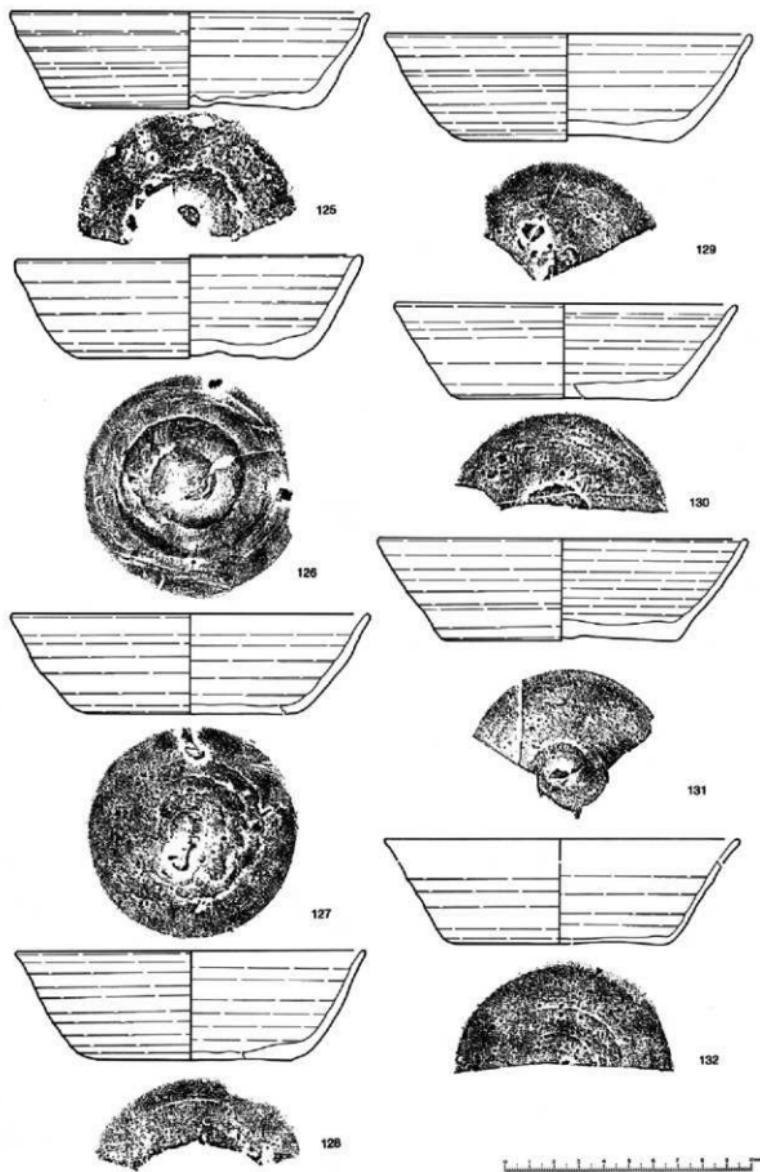
第22図 大神塚跡出土須恵器実測図 (4)

149点の完形資料と他に2,050点の須恵器坏の破片がある。底部切離しは第33図-265の回転糸切無調整を除けば、全て回転ヘラ切り無調整である。本群土器を特徴的に分類し、次の24類に細分している。

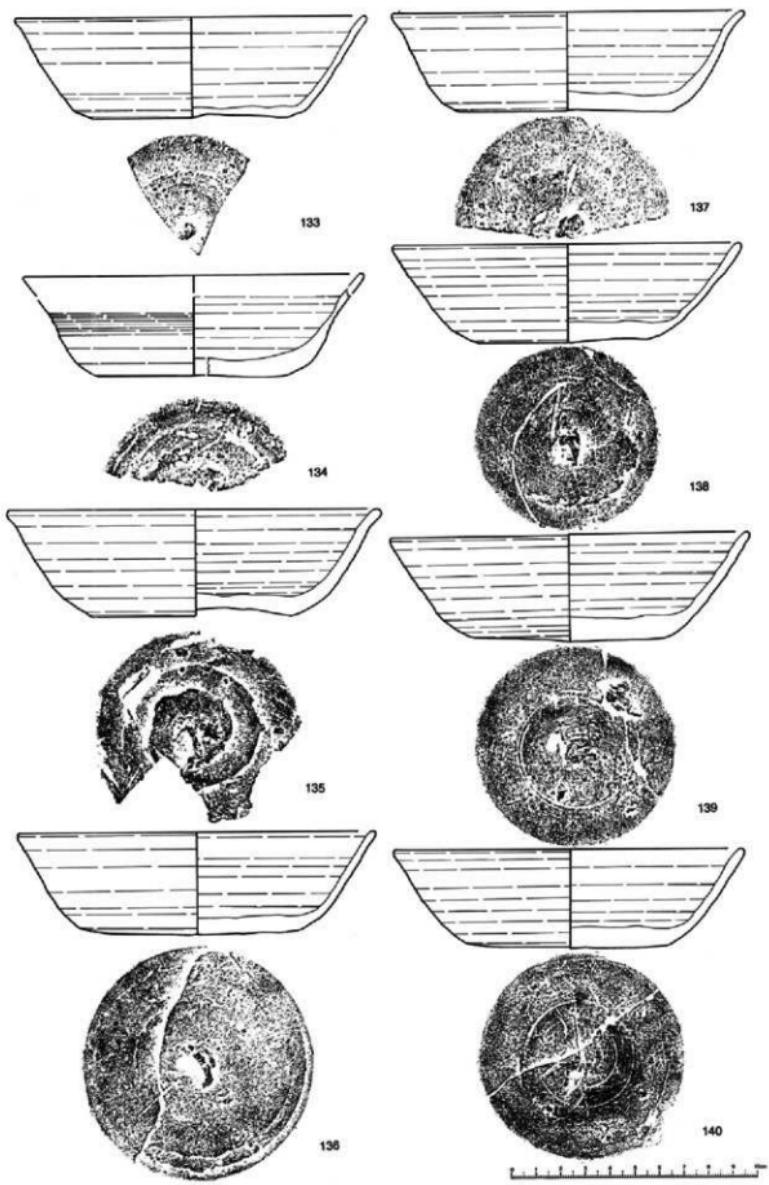
- ・ C群 1<sup>1</sup> 類—底部の比率が大きく、胴部が斜めに立ち上がるもの。
- ・ C群 1<sup>2</sup> 類—底部が僅かに内曲気味で、斜めに立ち上がる
- ・ C群 1<sup>3</sup> 類—底辺部が内反気味をなし、こころなしか内曲気味に立ち上がるもの。
- ・ C群 2<sup>1</sup> 類—底部が僅かに内曲気味で、内曲する胴部が口縁部で僅かに外反するもの。
- ・ C群 2<sup>2</sup> 類—底部が緩やかな曲線を描き極少の外張り気味に胴部が立ち上がるもの。
- ・ C群 2<sup>3</sup> 類—底部が幾分僅かに内曲気味で、器高の比が大き緩やかな外反を呈するもの。
- ・ C群 3<sup>1</sup> 類—底部が平坦で、外に大きく胴部が開くもの。
- ・ C群 3<sup>2</sup> 類—底部の中心部が凸状を有するもので、胴部が曲しながら僅かに外反するもの。
- ・ C群 3<sup>3</sup> 類—C群 2<sup>2</sup> 類と基本的には同形態であるが、底部の比がやや大きく外反気味のもの。
- ・ C群 3<sup>4</sup> 類—底部が平坦で胴部から口縁部にかけてほぼ斜めに立ち上がるもの。
- ・ C群 4<sup>1</sup> 類—C群 3<sup>2</sup> 類に近い形態で、底部の中心部が凸状を有し、胴部から口縁部にかけてほぼ斜めに立ち上がるもの。
- ・ C群 4<sup>2</sup> 類—底部の比が比較的大きく、器高が低い胴部が斜め立ち上がるもの。
- ・ C群 4<sup>3</sup> 類—一部の中心部が僅かに凸状を有し、下胴部で微かにくびれそのまま外に開くもの。
- ・ C群 5<sup>1</sup> 類—底部の中心がこころもち凸状を有し、僅かな外反気味に立ち上がるもの。
- ・ C群 5<sup>2</sup> 類—同じく内曲気味に立ち上がるもの。
- ・ C群 5<sup>3</sup> 類—器高の比が少なく、内曲気味に立ち上がるもの。
- ・ C群 6<sup>1</sup> 類—丸みを帯びた底部から曲しながら緩やかに胴部が立ち上がるもの。
- ・ C群 6<sup>2</sup> 類—底部が平坦で、器高が比較的低く、斜めに強く胴部が口縁に向かうもの。
- ・ C群 6<sup>3</sup> 類—底部の比が小さく、胴部から口縁部にかけて内曲気味のもの。
- ・ C群 7<sup>1</sup> 類—底部の比が小さく、胴部から内曲気味に立上り口縁部で幾分外反するもの。
- ・ C群 7<sup>2</sup> 類—口径の比が少なく、長身の器高を保ちながらほぼ斜めに立上り、微かに外反気味のもの。
- ・ C群 7<sup>3</sup> 類—極端に器高が低く、外反気味に胴部が立ち上がるもの。
- ・ C群 7<sup>4</sup> 類—鉢形の器形を有するもの。
- ・ C群 7<sup>5</sup> 類—底部が大きく内曲し、器高が低い皿状を呈するもの。
- ・ C群 8 類 一本群に属する坏類の形態が不明瞭なものを一括した。

この中で注目されるのは、C群 1<sup>1</sup> 類～1<sup>3</sup> 類類の坏群で灰原及びDY3の出土で占められており、米沢では大浦B遺跡・笹原遺跡・上浅川遺跡等で主体的に検出されている。この仲間は大浦編年でいうⅡb期～Ⅲ期の坏群と共通している。

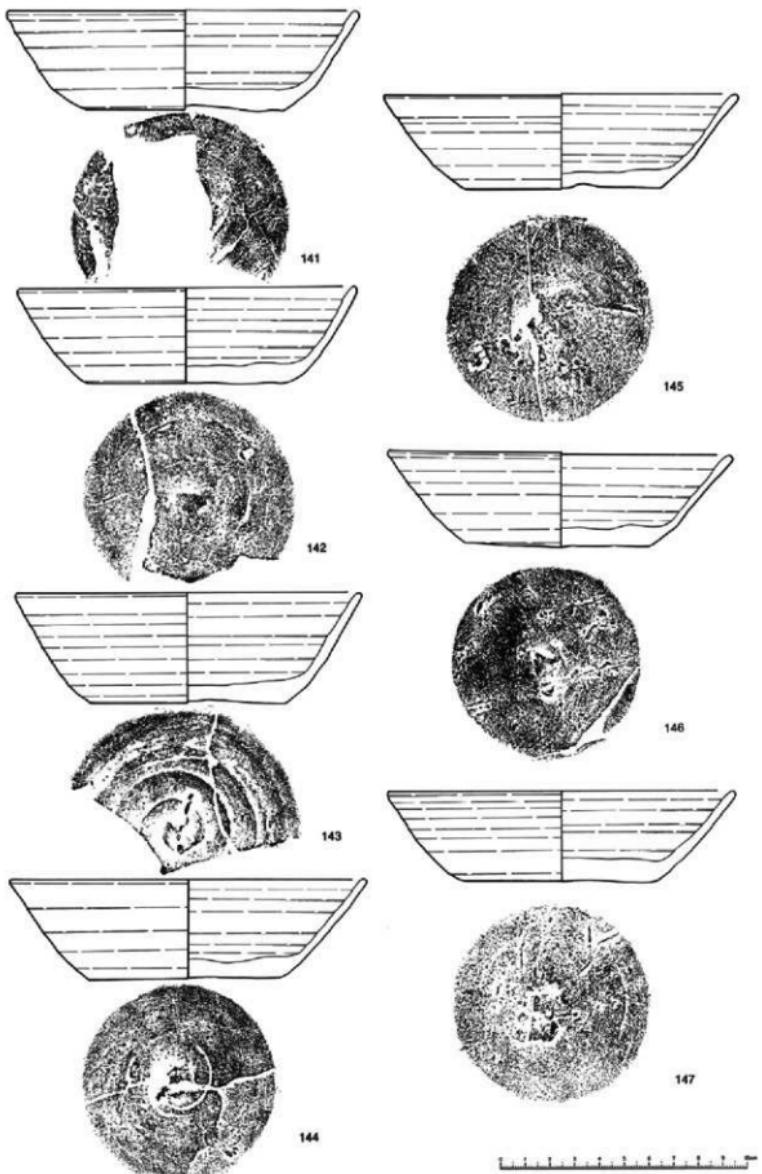
他の坏類では2類・3類が大浦編年のⅢ期、4類～7類が大浦編年のⅡb期の特徴に類似している。従って、C群土器に関しては大浦編年のⅡb期の特徴を受け継ぎながらⅢ期の位置にあると推測するのが妥当といえる。



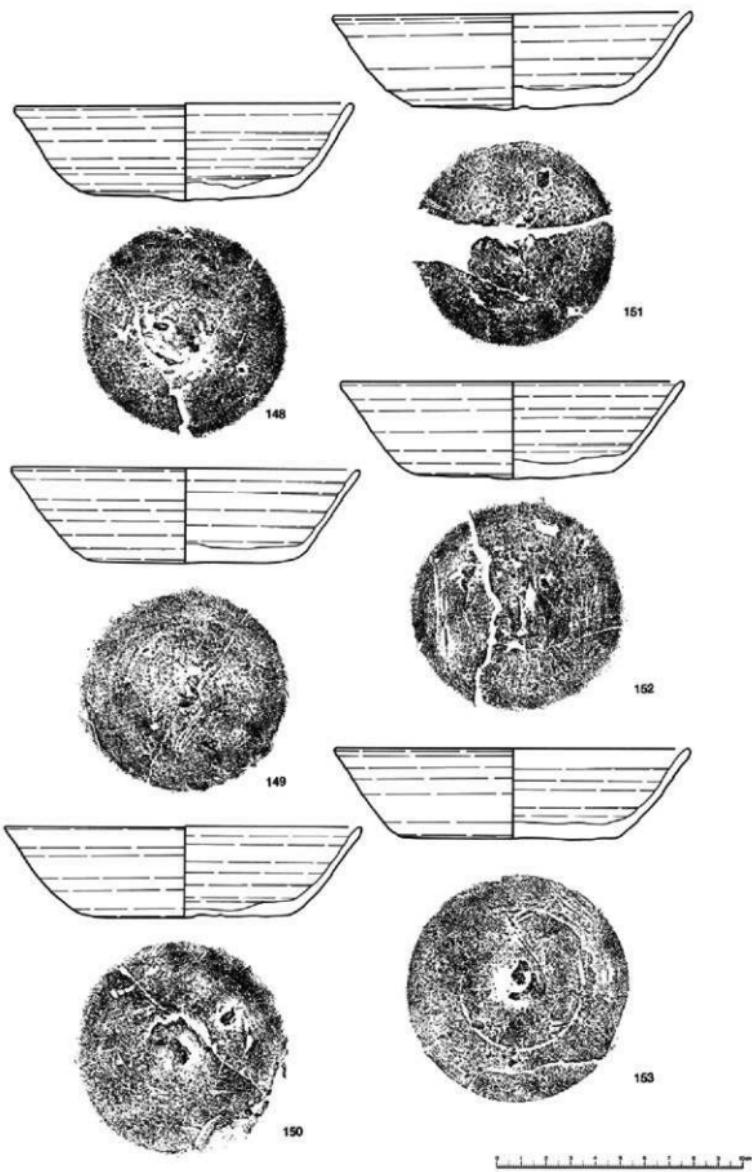
第23図 大神窟跡出土須恵器実測図 (1)



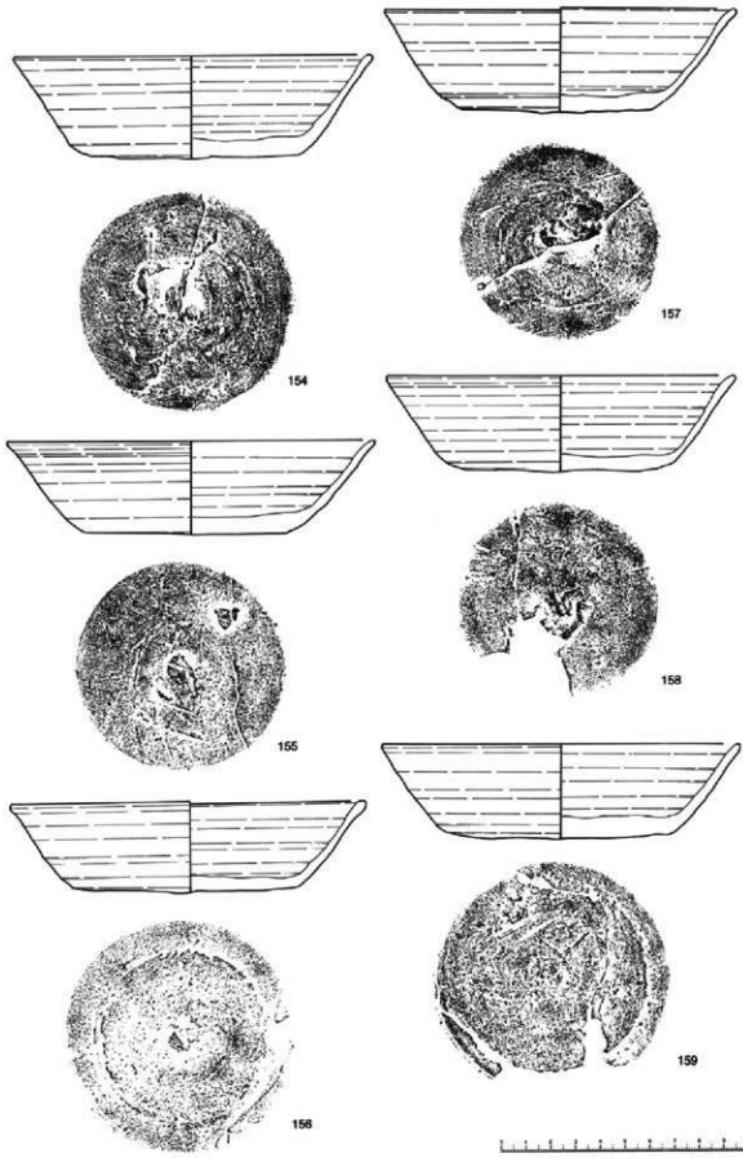
第24図 大神窟跡出土須恵器実測図 ⑩



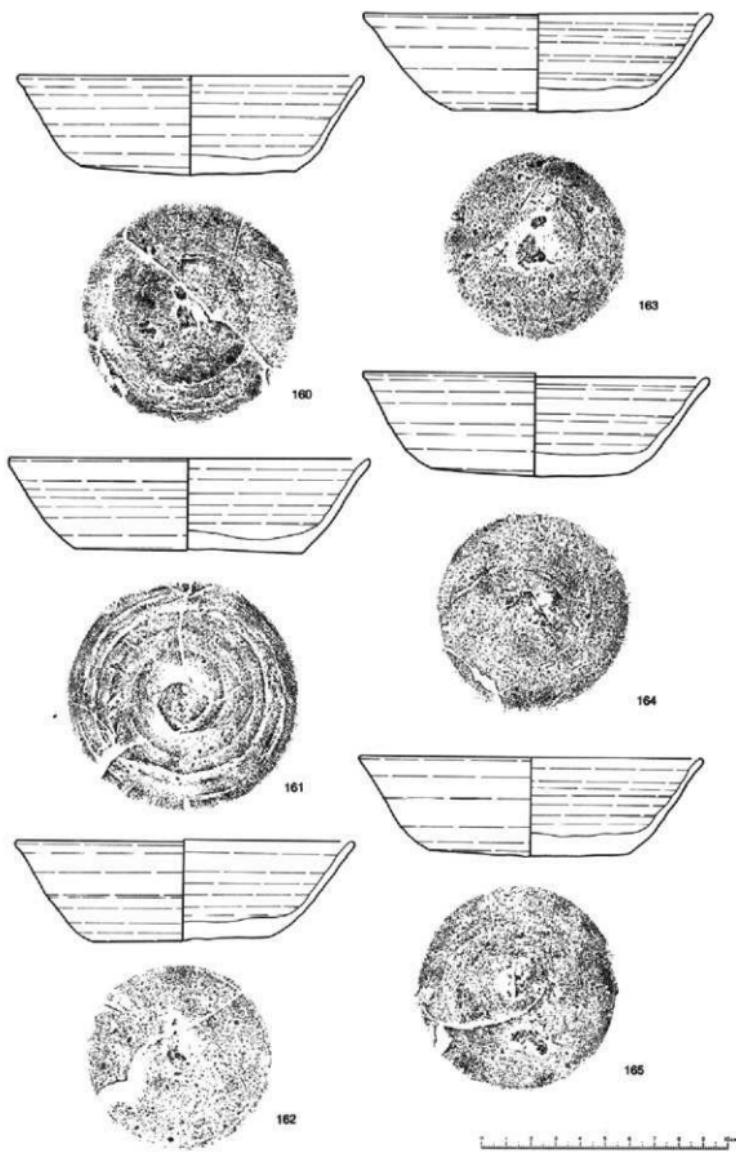
第25図 大神窟跡出土須恵器実測図 (II)



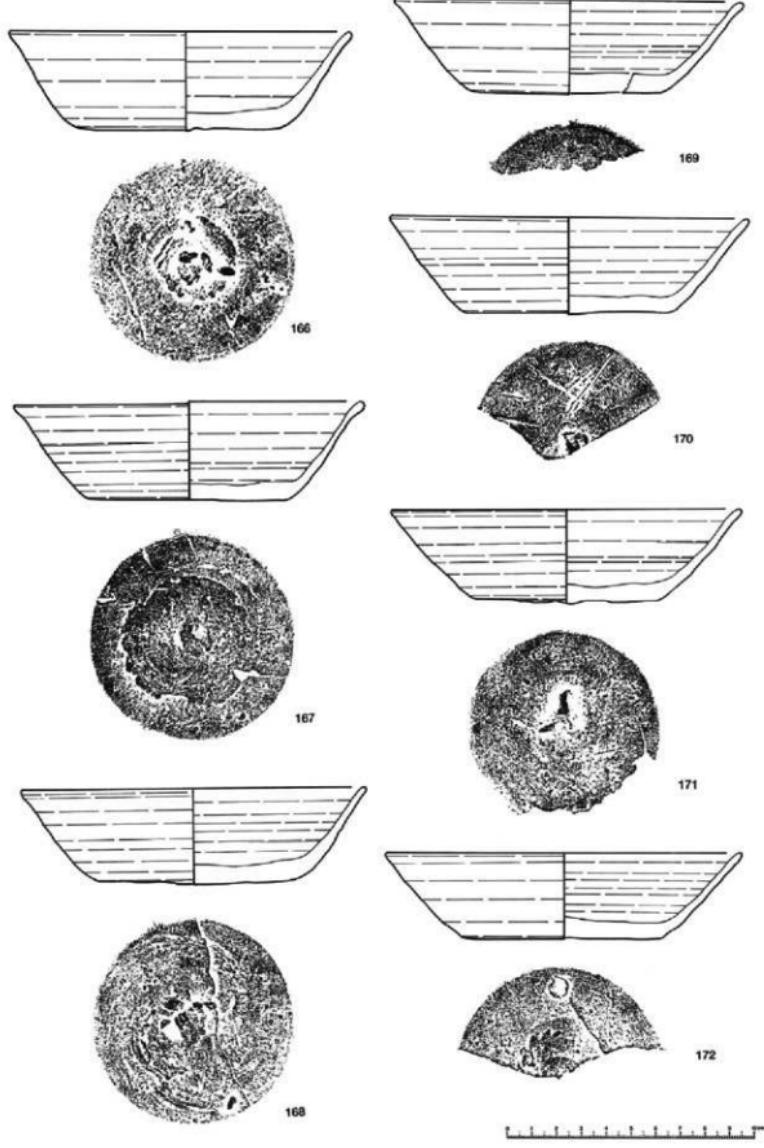
第26図 大神窟跡出土須恵器実測図 18



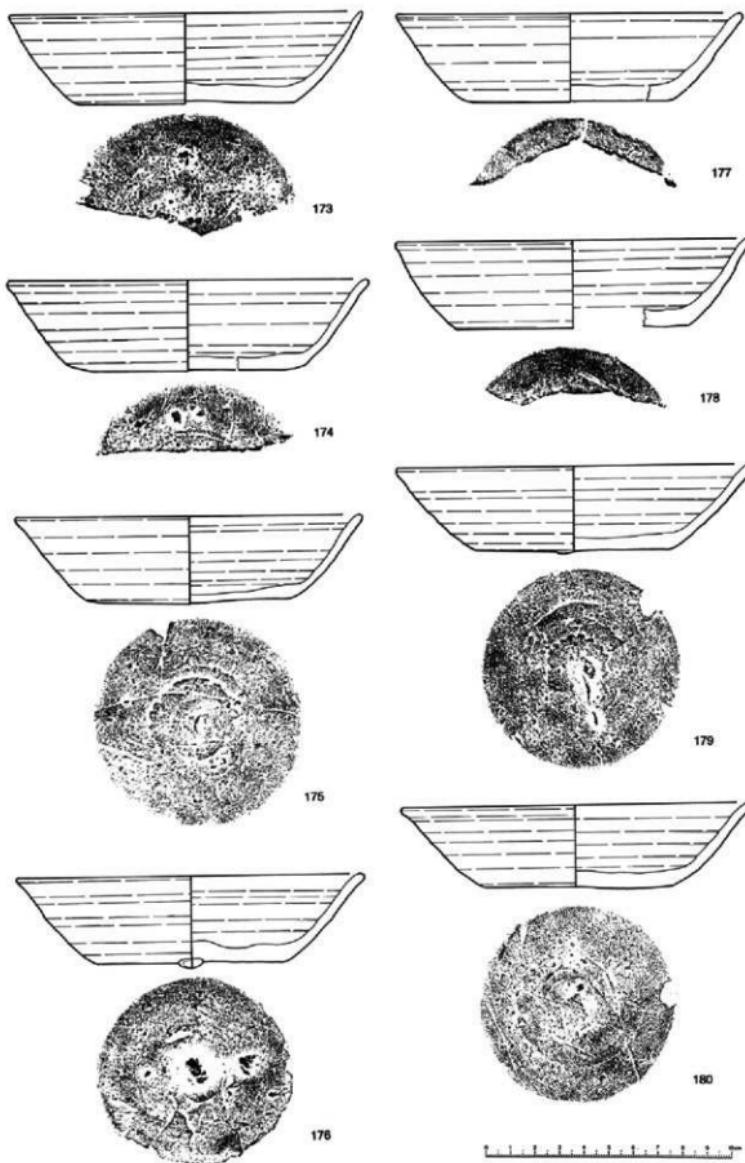
第27図 大神窟跡出土須恵器実測図 19



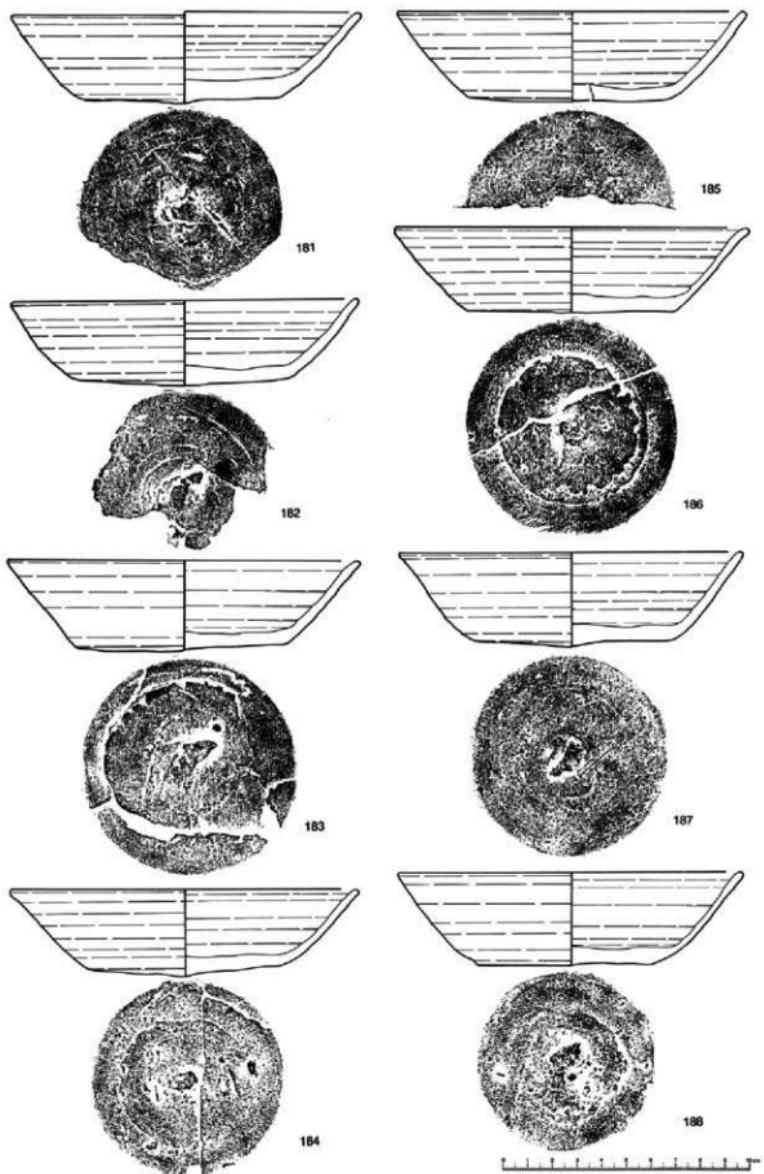
第28図 大神窟跡出土須恵器実測図(④)



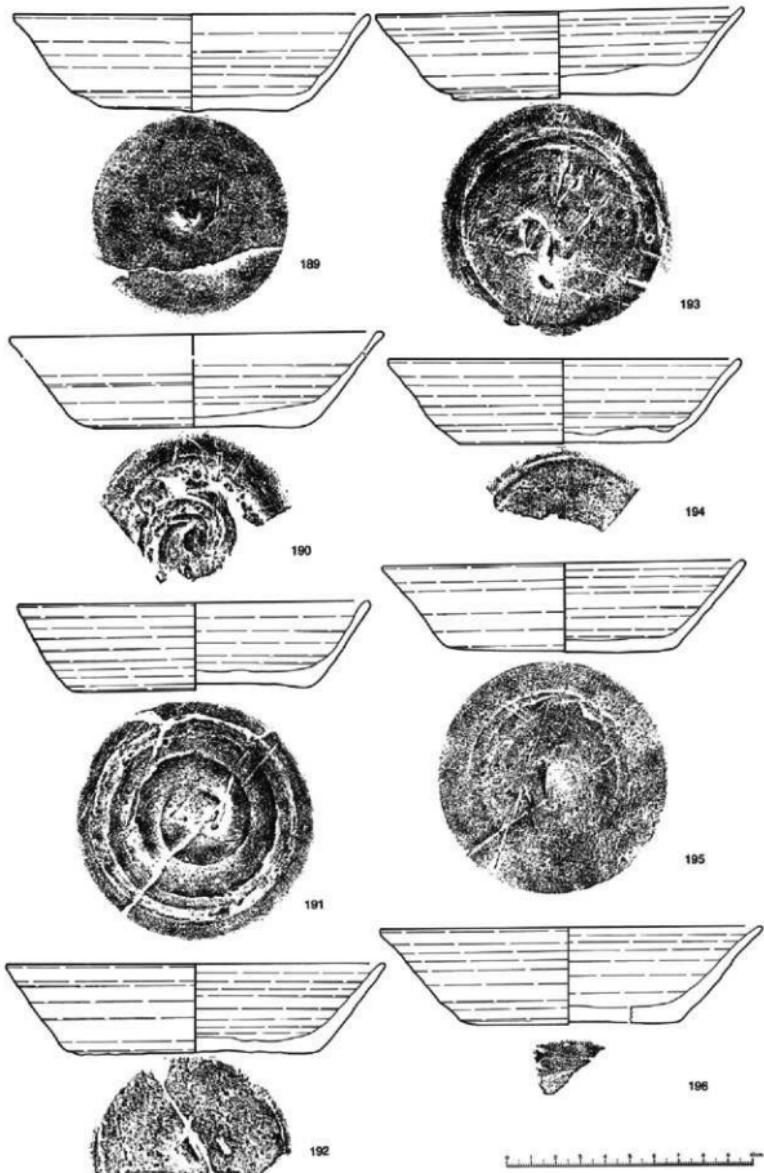
第29図 大神窟跡出土須恵器実測図(2)



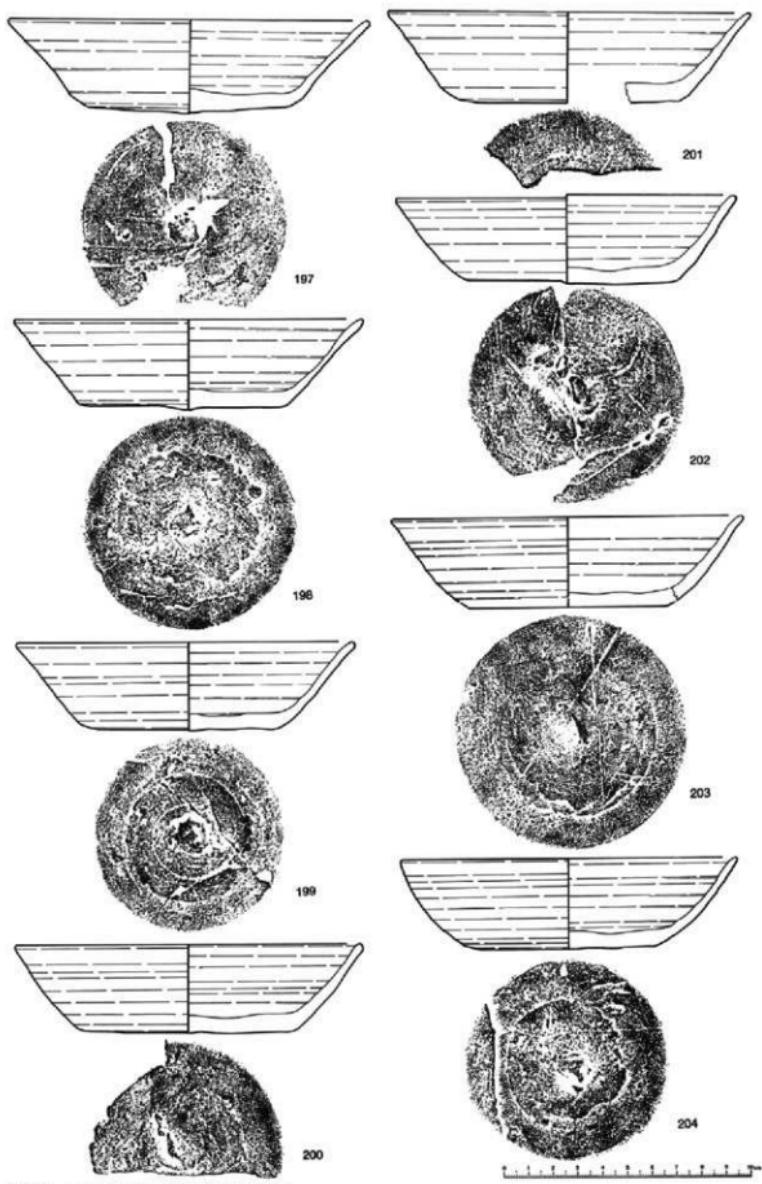
第30図 大神廬跡出土須恵器実測図 ②



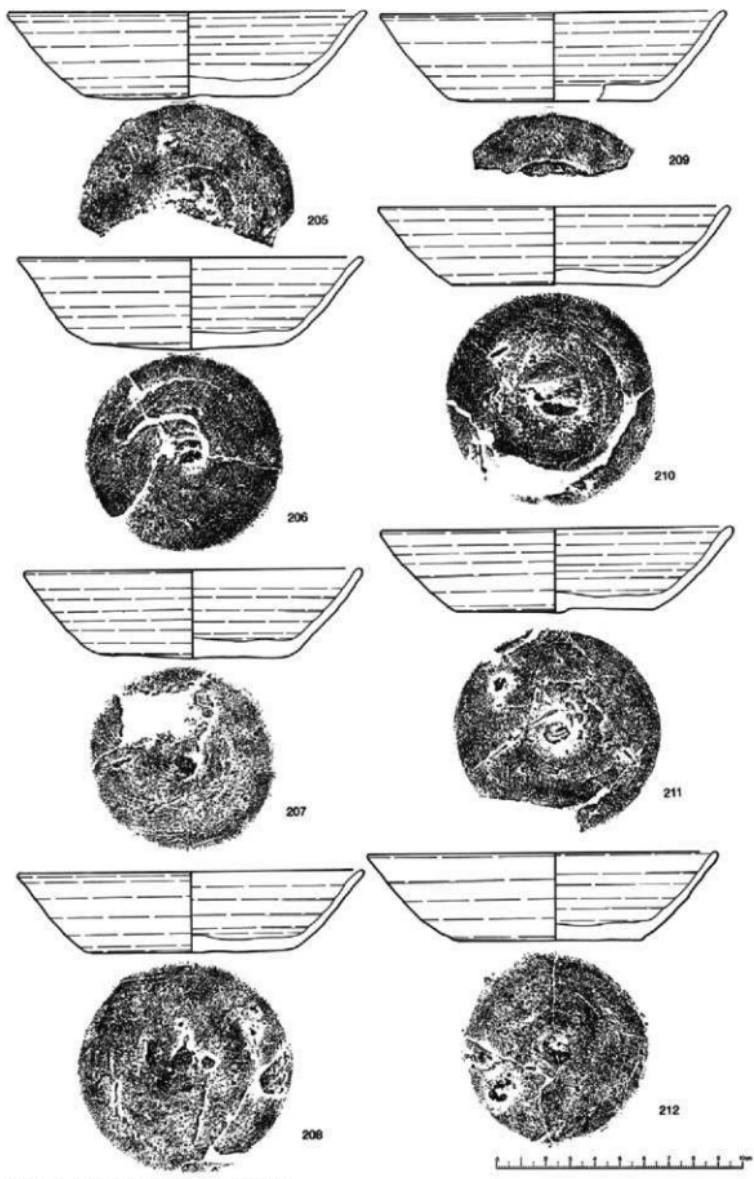
第31図 大神窟跡出土須恵器実測図 23



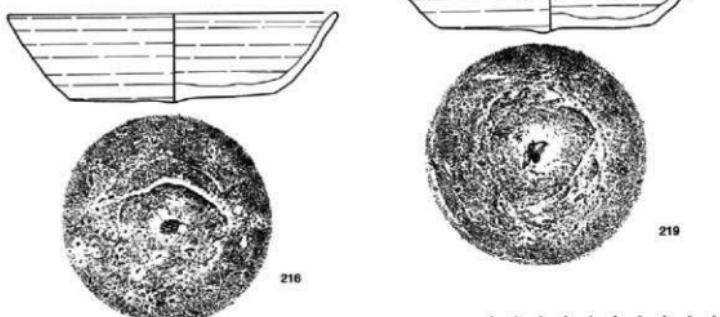
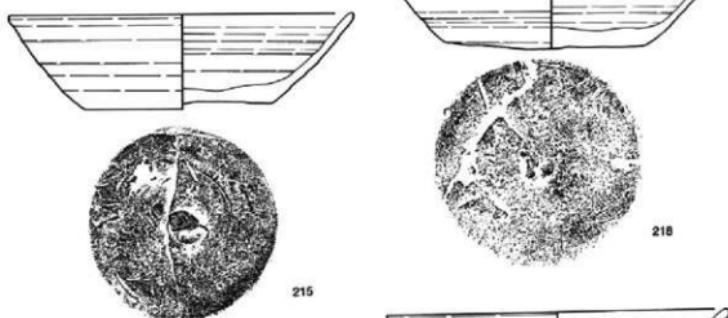
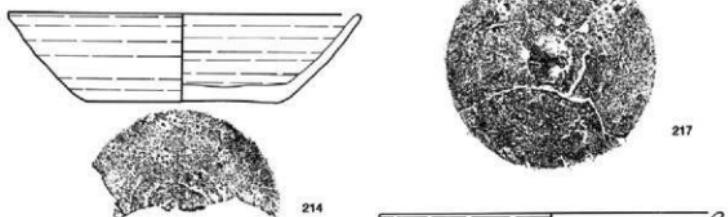
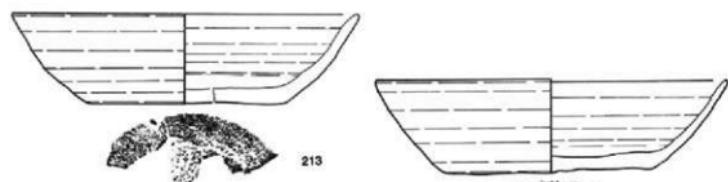
第32図 大神座跡出土須恵器実測図(2)



第33図 大神窟跡出土須恵器実測図 四

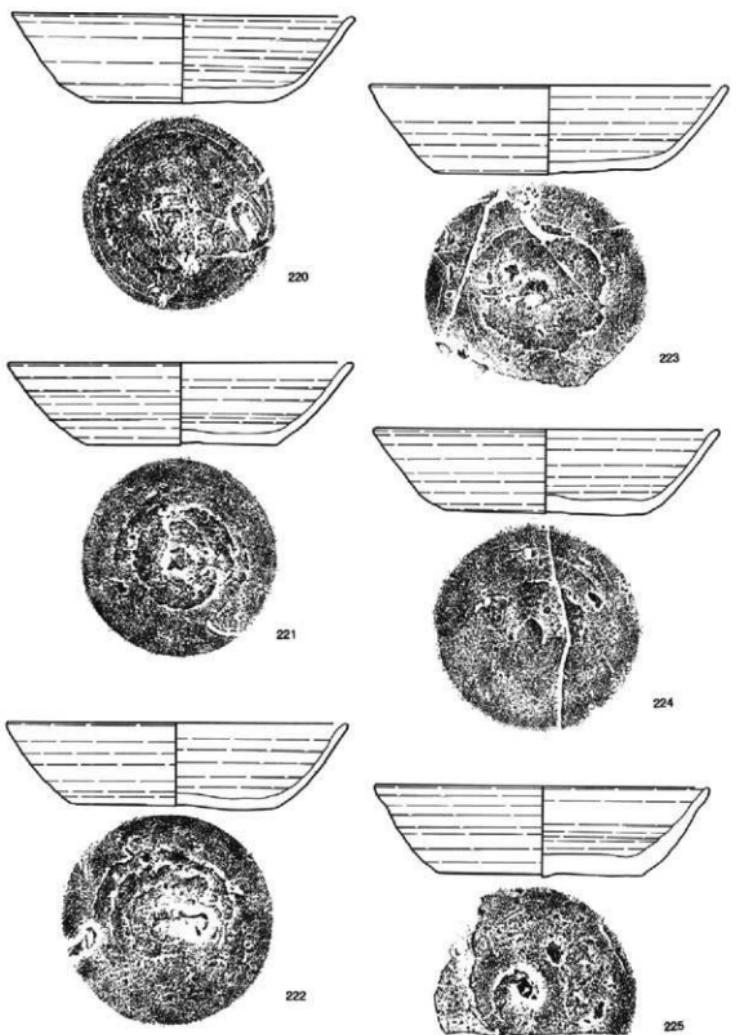


第34図 大神窟跡出土須恵器実測図 26



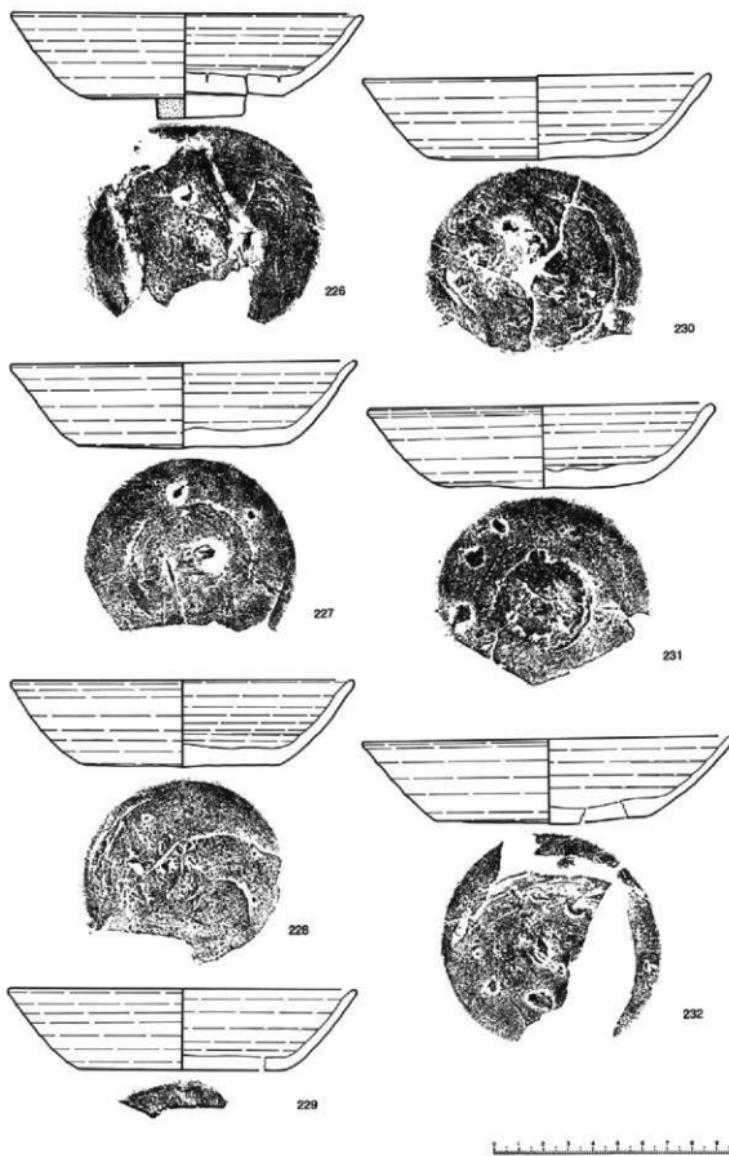
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 cm

第35図 大神靈跡出土須恵器実測図 ④

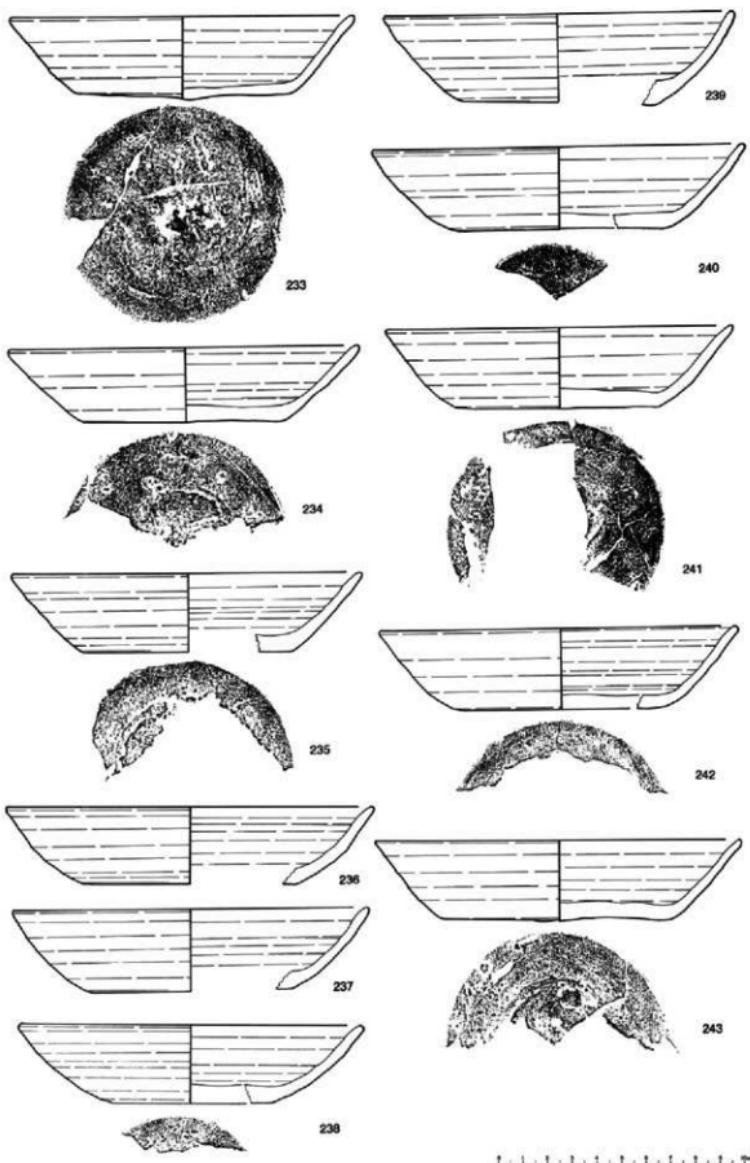


第36図 大神墓跡出土須恵器実測図 ④

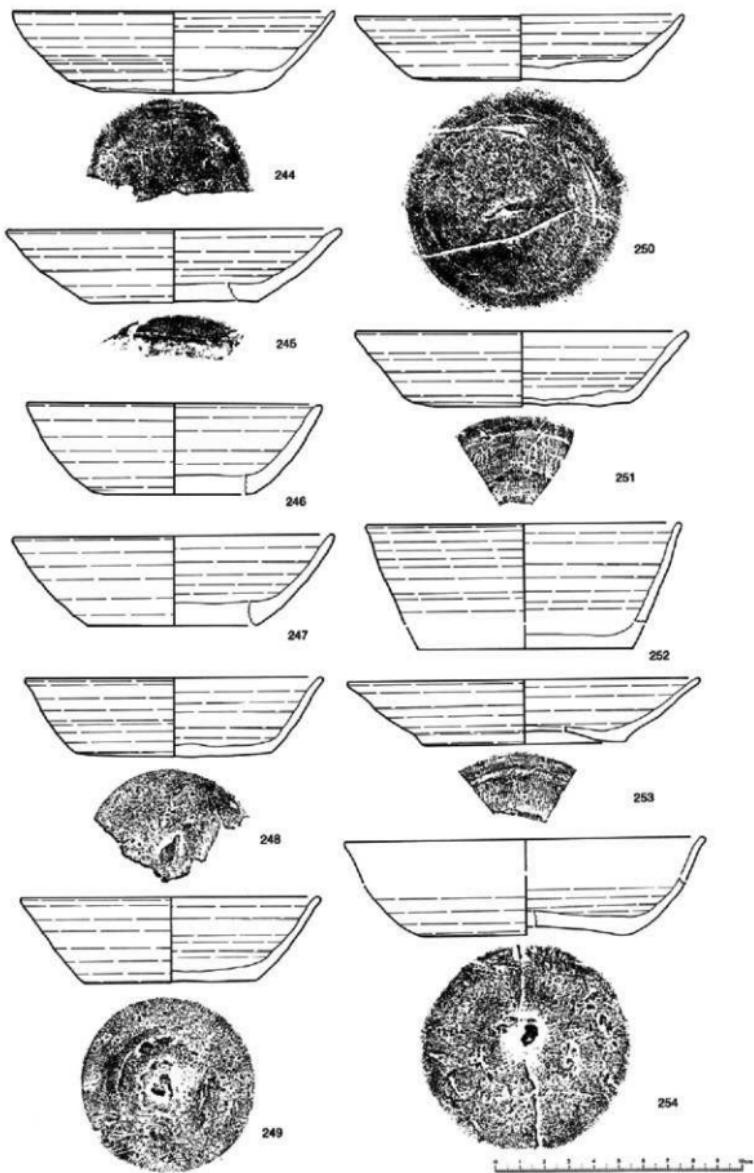




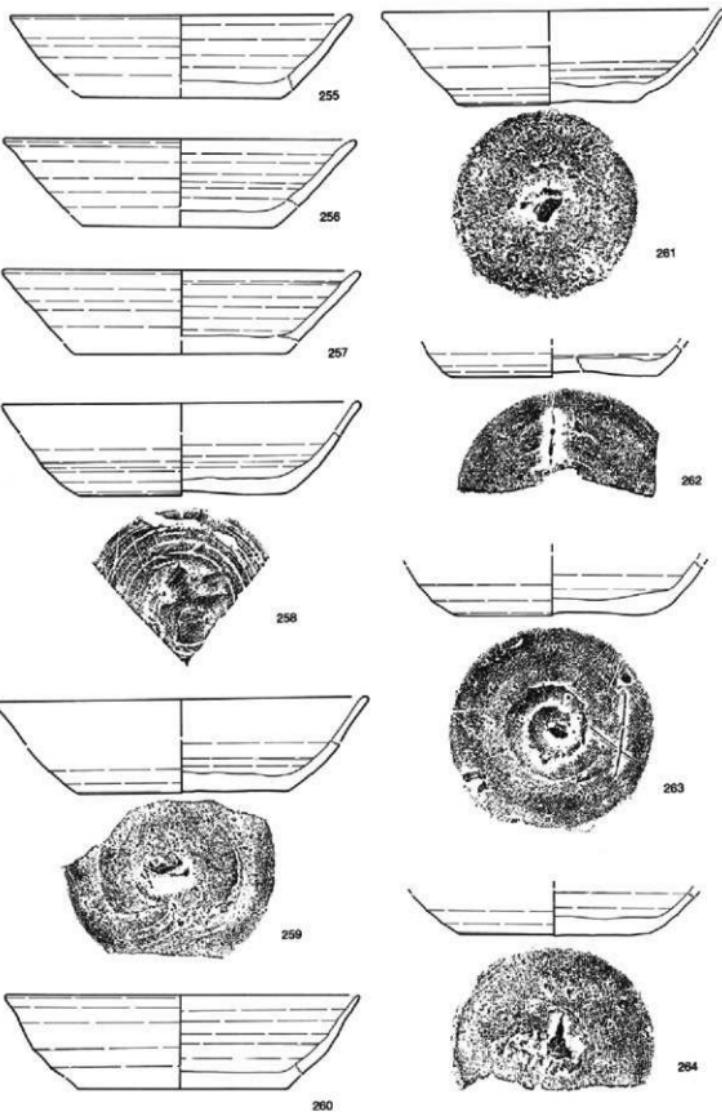
第37図 大神窟跡出土須須器実測図 四



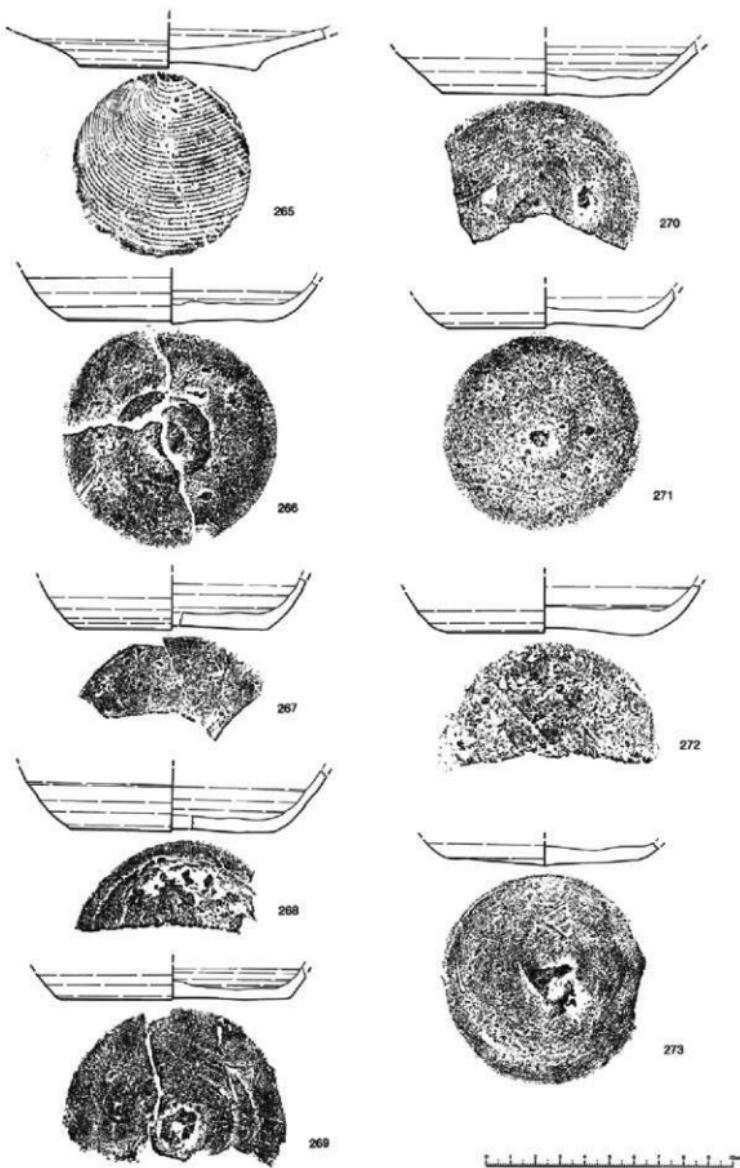
第38図 大神窟跡出土須恵器実測図 ③



第39図 大神窯跡出土須恵器実測図 8)



第40図 大神窟跡出土須恵器実測図 (2)



第41図 大神麻跡出土須恵器実測図 (3)

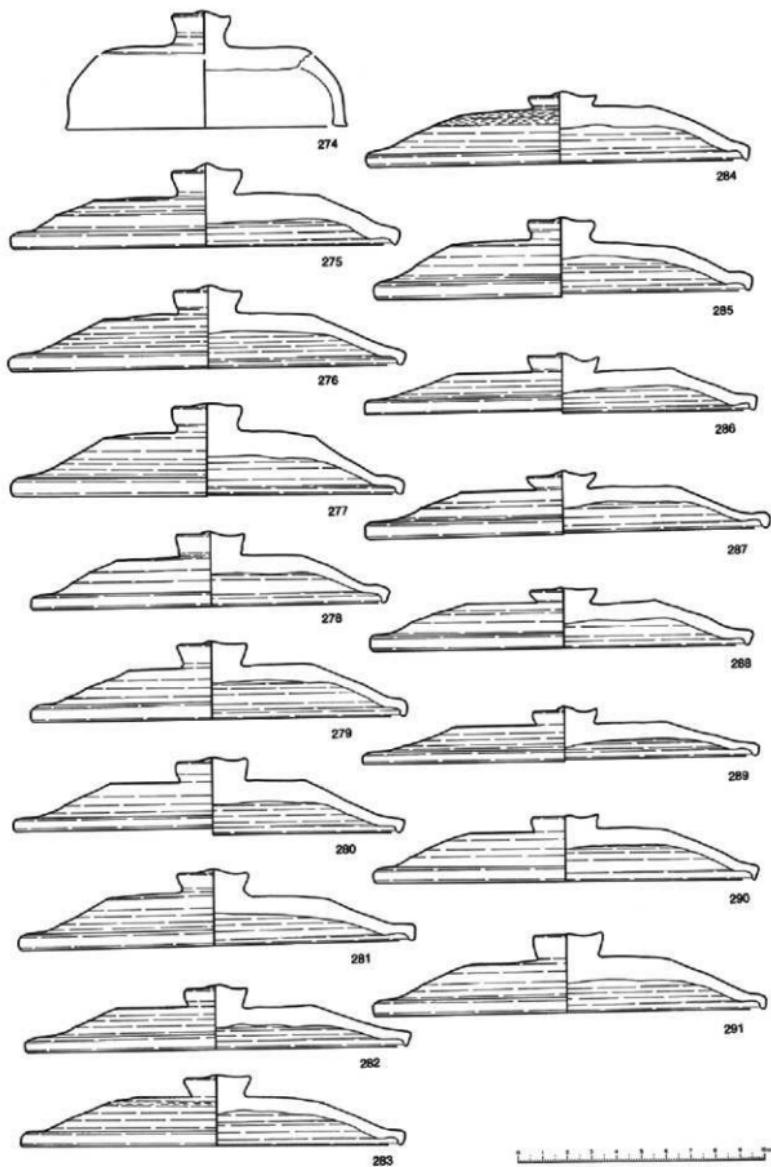


4) D群土器『第42図～第47図、第16図版274～278～第22図版-277・287・329・364・376・387、  
第23図版-416』

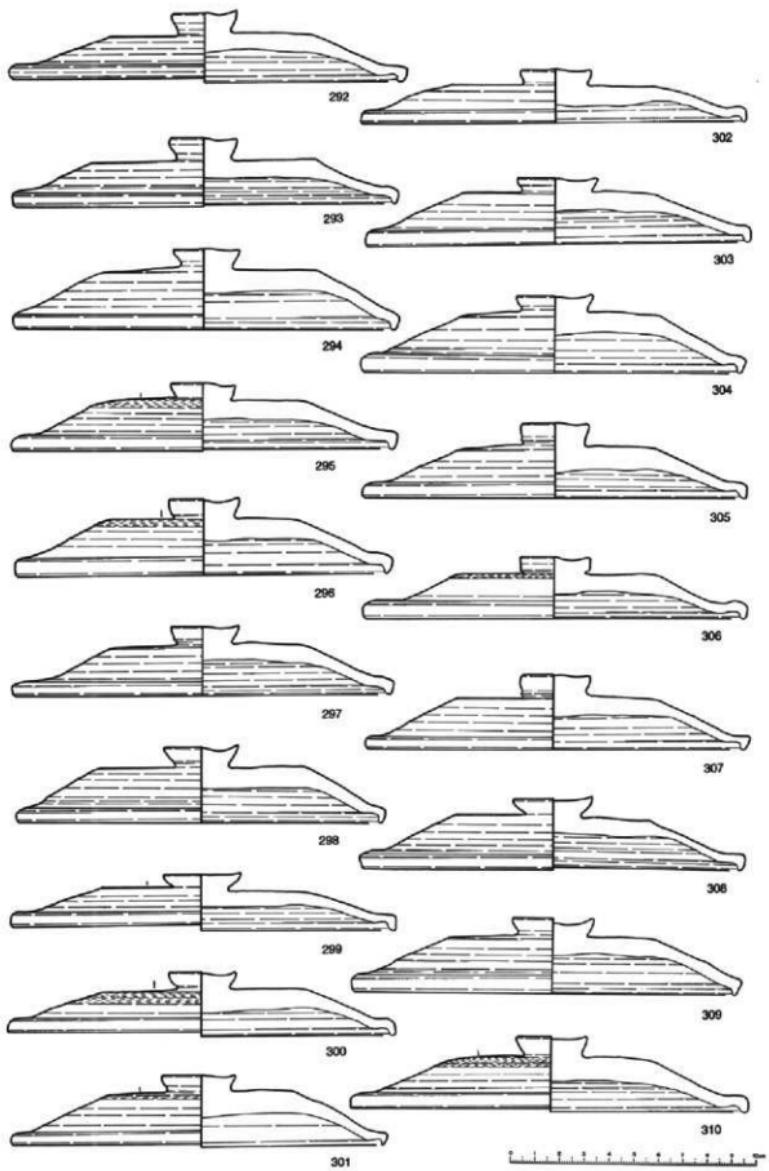
須恵器蓋類を一括した。この仲間には、BN2から108点、灰原が3点、DY3が3点、KY5が1点の計115点の完形資料と他に須恵器蓋の破片607点がある。本群土器を特徴的に分類し、次の18類に細分した。

- ・D群1類 一器高が高く弱宝珠のツマミを呈し、上部は回転ヘラケズリを施して稜線を境にほぼ直角に口縁部に垂下するもので、短頸蓋の蓋に用いられる。
- ・D群2<sup>1</sup>類 一宝珠形のツマミを有し、上部が平坦で肩部の稜線から「へ」字状に斜行して口縁部でやや水平気味になり、口辺が折返すもの。
- ・D群2<sup>2</sup>類 一弱宝珠のツマミをもち、稜線が不明瞭で円弧を描きながら口縁部に向かうもの。
- ・D群2<sup>3</sup>類 一器高が低く、弱宝珠のツマミと稜線から緩やかに斜行して口辺が折返すもの。
- ・D群3<sup>1</sup>類 一ツマミの上部が回むかのように僅かに弱宝珠状をなすものを本類とした。上部が平坦で器高の比が低く、稜線の位置が口縁部とツマミ間に置くもの。
- ・D群3<sup>2</sup>類 一稜線が未発達でツマミよりに位置するのが特徴で、斜行する胴部が口縁で外反し比較的強く口辺が折返すもの。
- ・D群3<sup>3</sup>類 一先の3<sup>2</sup>類に近いが、稜線の位置が上部の中央にもつもの。
- ・D群3<sup>4</sup>類 一稜線が退化し、円弧を描きながら口縁部に斜行するもの。
- ・D群3<sup>5</sup>類 一器高の比が低く、稜線が未発達でツマミよりに示すもの。
- ・D群3<sup>6</sup>類 一上部が円弧を描きながら口縁部で水平に外反するもの。
- ・D群3<sup>7</sup>類 一ツマミ部が低く、上部がツマミよりに傾斜を示すことからツマミ部が低い感じをもつ。稜線が明瞭でほぼ斜めに斜行した口縁から口辺が折返す形態のもの。
- ・D群4<sup>1</sup>類 一ツマミの中央部が回む形態を本類とした。ツマミにより強く内傾を有し、稜線が上部の中央に置きながら斜行するもの。
- ・D群4<sup>2</sup>類 一上部が平坦でツマミよりの稜線から口縁に向かいやや外反気味に斜行するもの。
- ・D群4<sup>3</sup>類 一極端に器高が低く、稜線が中央に位置し「N」字状にツマミ側の内傾と斜行した胴部が口縁部で外反する特徴をもつもの。
- ・D群4<sup>4</sup>類 一稜線が未発達で上部から緩やかに斜行するもの。
- ・D群4<sup>5</sup>類 一器高が高く、ツマミよりに稜線を配し、斜行する胴部が口縁部で水平に外反するもの。
- ・D群4<sup>6</sup>類 一同じく稜線が鮮明なもの。
- ・D群5類 一D群3<sup>3</sup>類に近い器形を有するが、上部にツマミをもたないもの。
- ・D群6類 一本群に属する蓋類の形態が不明瞭なものを一括した。

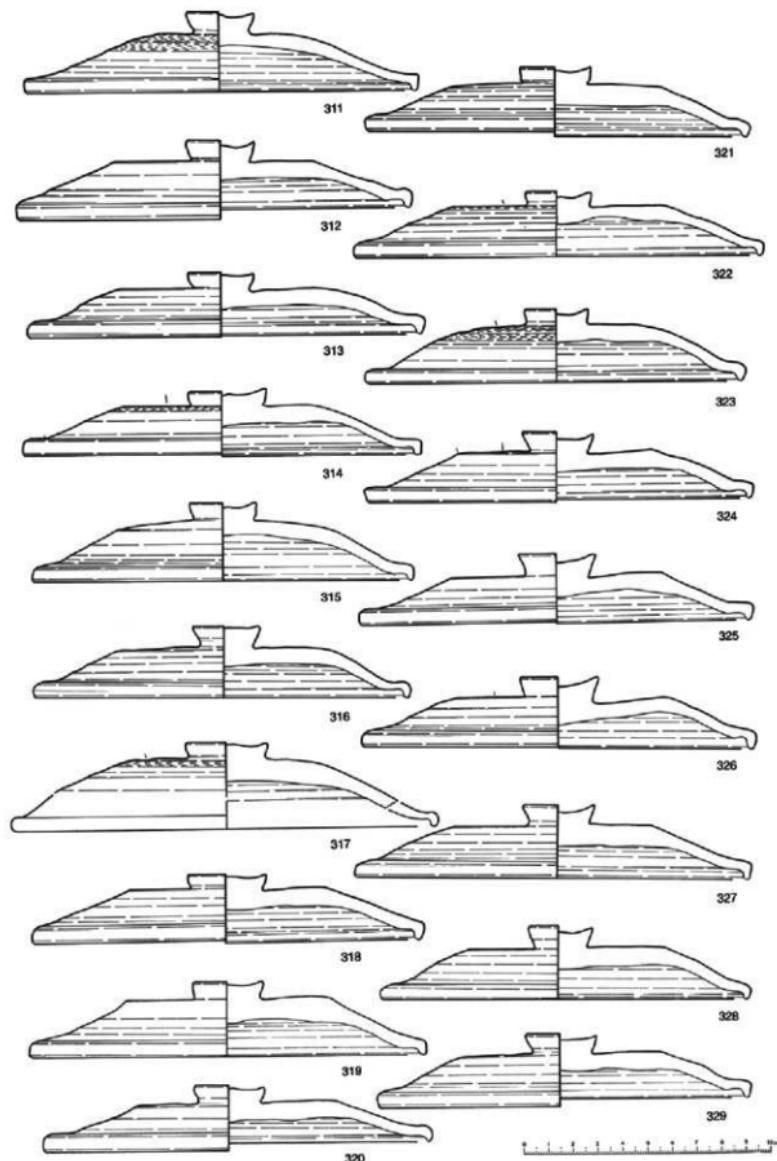
この中で注目されるのは、D群1類の蓋形態でDY3とKY5からの出土となっている。特にKY5の蓋、第51図-416は同図-417と共に溝内部より検出されたものであり、意図的な蔵骨器の蓋として機能したものであり、大浦編年のIIa期に相当する。また、D群3類の一



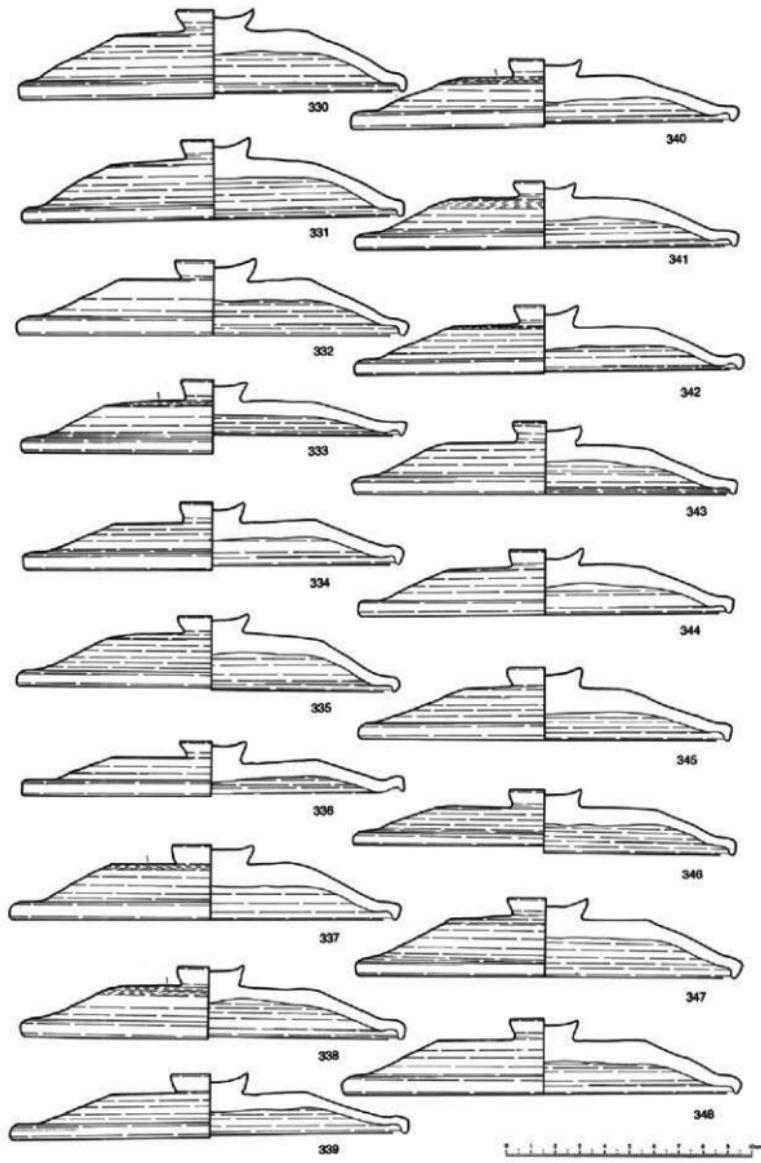
第42図 大神薦跡出土須恵器実測図 B4



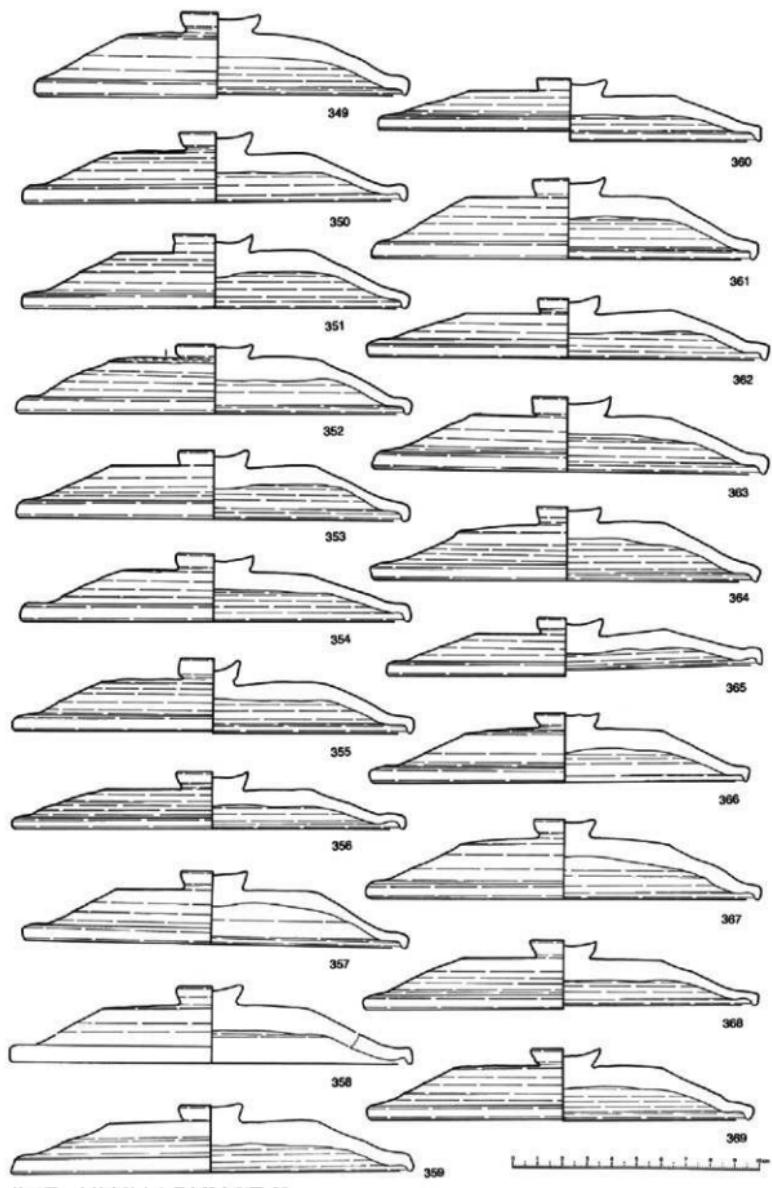
第43図 大神塚跡出土須恵器実測図 ⑤



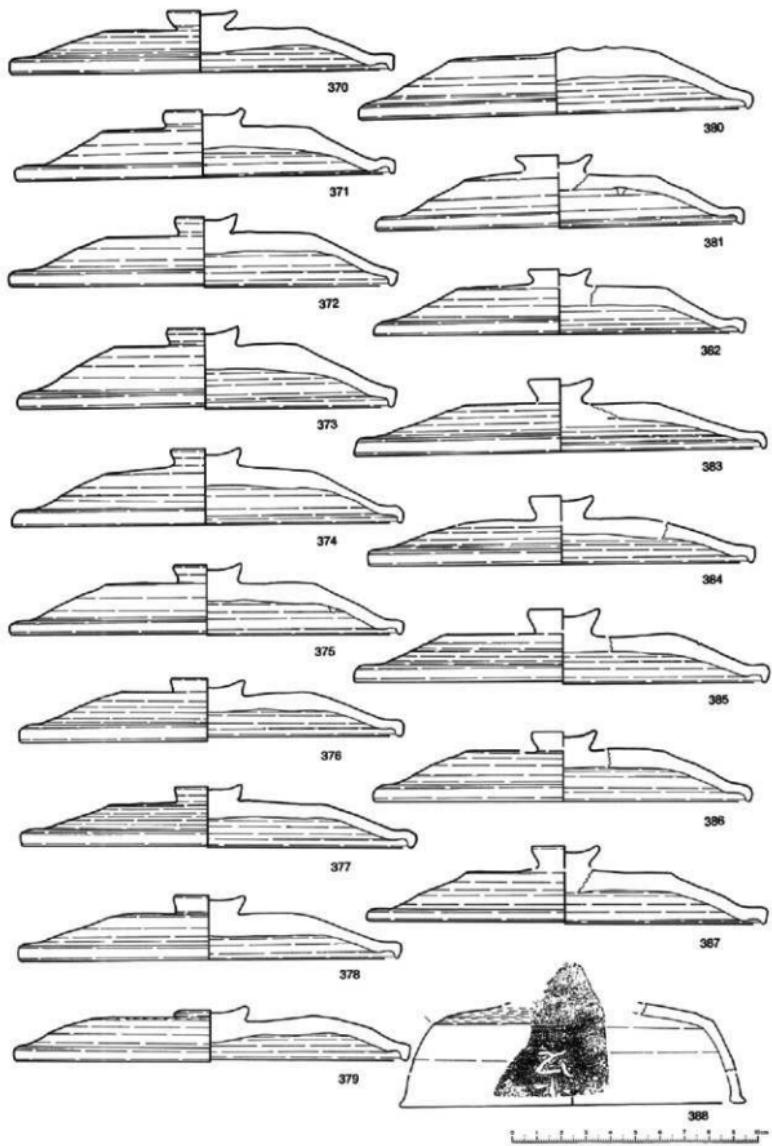
第44図 大神塚跡出土須恵器実測図 ⑥



第45図 大神麻路出土須恵器実測図(3)



第46図 大神麻跡出土須恵器実測図 (2)



第47図 大神墓跡出土須恵器実測図 (3)

部とD群2類に属する多くは大浦編年のⅡb期に近い特徴を有し、D群3類の大半とD群4類に関しては大浦編年のⅢ期の範疇に加えられる。

さらに、調整手法にも注目すべき特徴がみられる。それらは、蓋上部の稜線付近を調整する回転ヘラケズリ調整の存在で、D群3類とD群2類を中心にして全体の約3割にその痕跡を有するが、D群4類の蓋には僅かとなっている。つまり、大浦編年のⅡa期の主要調整手法となる回転ヘラケズリ調整が消滅に向かうⅢ期と符号する。

のことから、大神窯跡出土須恵器の蓋のもつ背景には、大浦編年のⅡ期の影響を継承しながら（残しながら）、突然の崩壊で製品が未収納のままで断念を余儀なくしたBN2の須恵器群は、大浦編年でのⅢ期の位置にあったと推測されるのである。

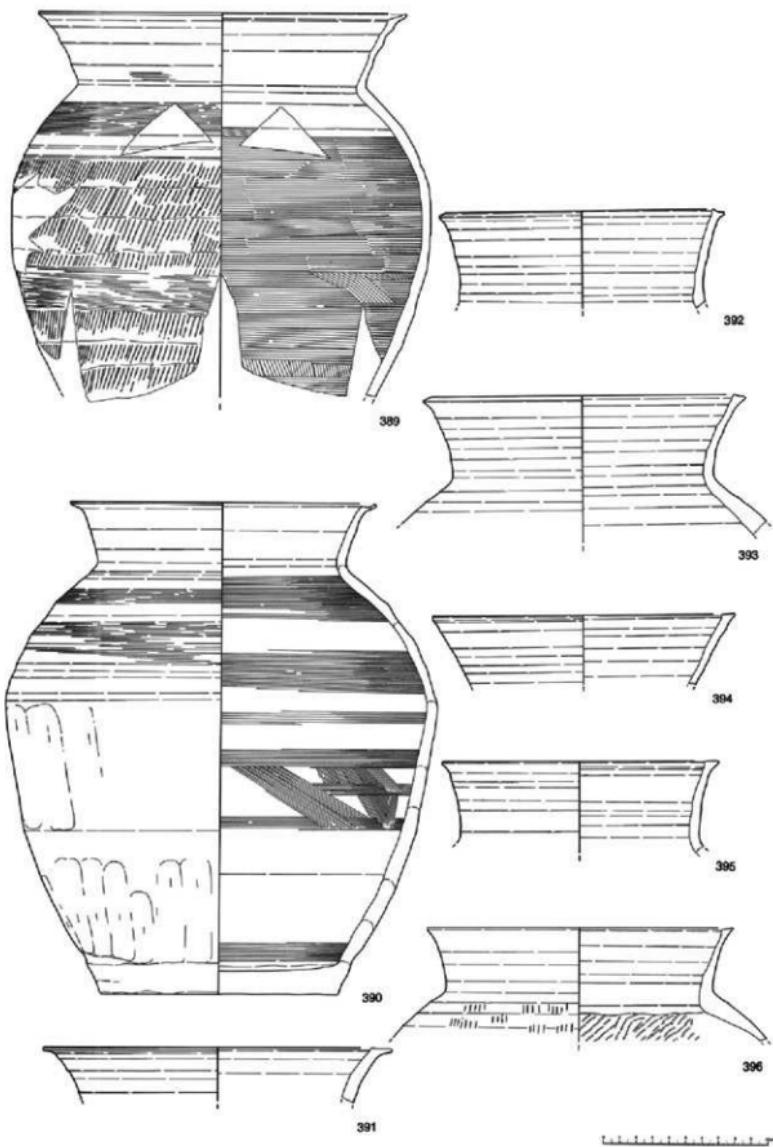
##### 5) E群土器『第49図～第52図－424、第22図版－389・398・390・404、第23図版－417・424』

須恵器壺類を一括した。この仲間には、BN2が3点、灰原が19点、DY3が10点、KY51点の計33点の完形・固化資料と他に須恵器壺の破片1,279点がある。本群土器を特徴的に分類し、次の11類に細分した。

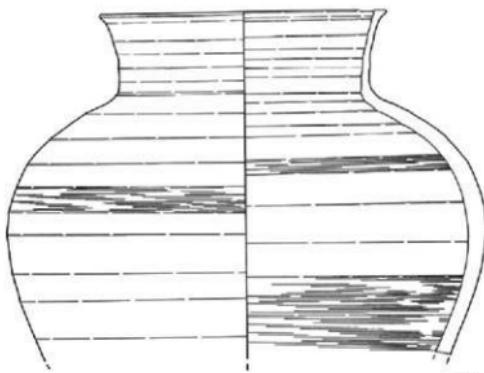
- ・E群1<sup>1</sup>類一口唇部がスプーン状を有するのが特徴で、斜めに立ち上がる頭部から口縁部でやや外反し、曲しながら肩上部に最大径を置くもの。
- ・E群1<sup>2</sup>類一口縁部が外反し、口唇部を嘴状に示したもの。
- ・E群1<sup>3</sup>類一口唇部が僅かに凹み、ほぼ真っすぐに頭部が立ち上がるもの。
- ・E群1<sup>4</sup>類一口唇部が僅かに嘴状を呈し、胴部が球形を示すもの。
- ・E群1<sup>5</sup>類一口縁部が大きく斜めに外反し、口唇部が平坦なもの。
- ・E群1<sup>6</sup>類一球形状の胴部から頭部が外に開き気味に立上り「く」字状の口唇部をもつ。
- ・E群1<sup>7</sup>類一短頸の壺で藏骨器である。蓋とともにKY5の底部に埋納されていた。
- ・E群2<sup>1</sup>類一壺形土器に類似した器形を有するもので、球形状の胴部からほぼ90°に近く立上り、帯状の口縁部をもつもの。
- ・E群2<sup>2</sup>類一頭部から強く外反する球形状の胴部を有する器形で「く」字状の口唇部をもつ。
- ・E群2<sup>3</sup>類一2<sup>2</sup>類に近い器形で、口縁部が破状の突堤をもつもの。
- ・E群2<sup>4</sup>類一長頸壺と推測されるもので、口唇部の内側に凹線状の折込が特徴となる。

この中で、注意したいのはE群1<sup>6</sup>類、E群2<sup>1</sup>類・2<sup>2</sup>類の3類で、口唇部の形態や器形の状況から小型の壺形土器に加わる可能性がある。今回の分類基準としては、内面調整の手法としての押目の有無にこだわった。つまり、外面調整に叩目が伴っても内面に叩目が存在しないものは基本的に壺形に分類している。大神窯跡のE群土器の多くは内面調整にカキメやロクロ調整を加えて整形している点で後述の壺形土器とは明らかに異なっており、基本的な定義には問題はないと考えている。

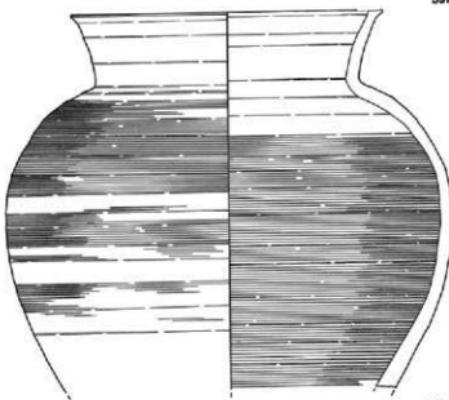
さて、8世紀段階での米沢周辺からの本群土器の出土例は、破片が大半で以外と少ないといえる。あえて付け加えると米沢市の大浦遺跡群・笠原・上浅川・荒川2遺跡等7遺跡からE群1<sup>1</sup>類・1<sup>7</sup>類、E群2<sup>1</sup>類・2<sup>2</sup>類に相当するものが検出されている。



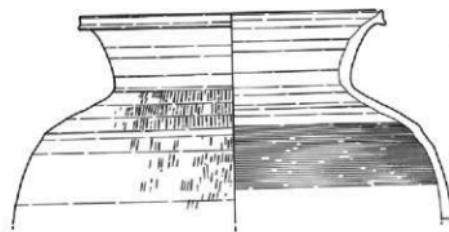
第48図 大神窟跡出土須恵器実測図 ④



397



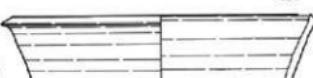
398



399



401



402

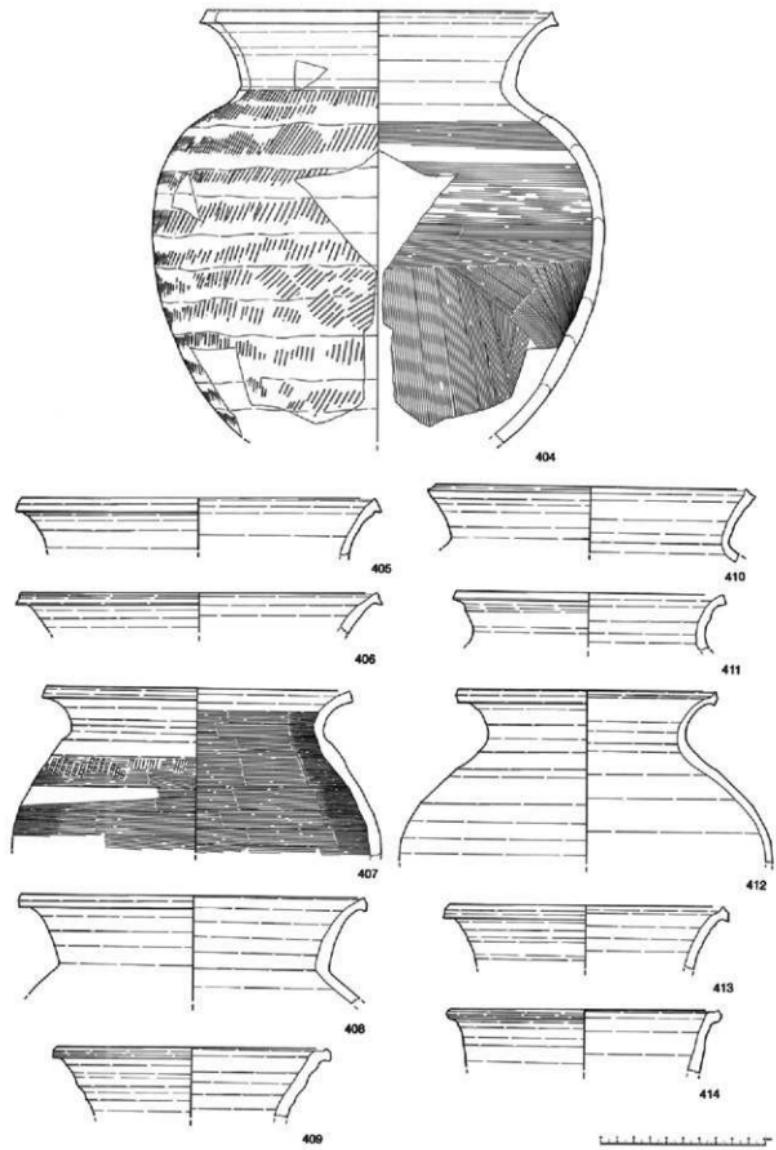


400

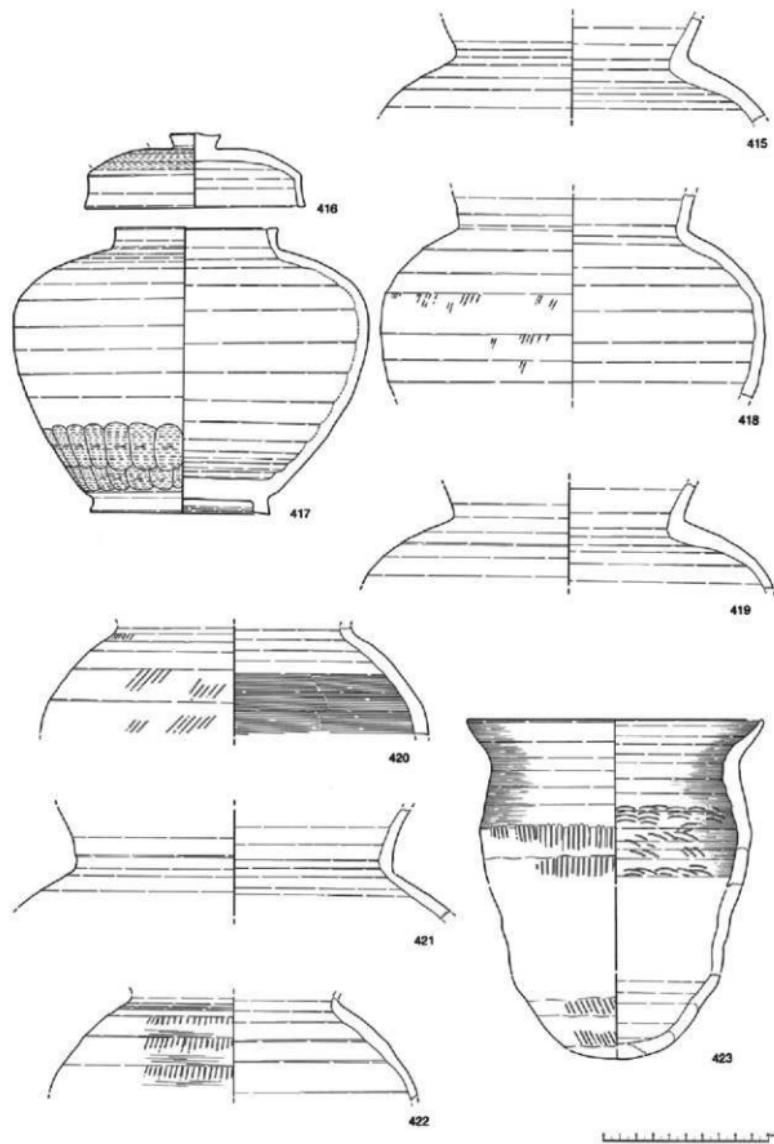


403

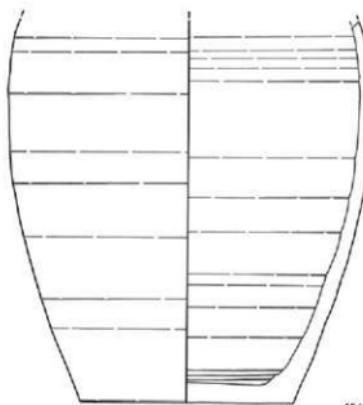
第49図 大神墓跡出土須恵器実測図 ④



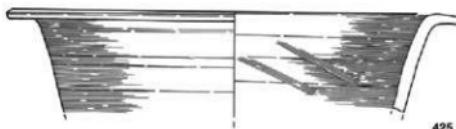
第50図 大神塚跡出土須恵器実測図(4)



第51図 大神窟跡出土須恵器実測図 #3



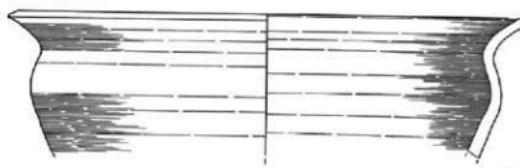
424



425



426



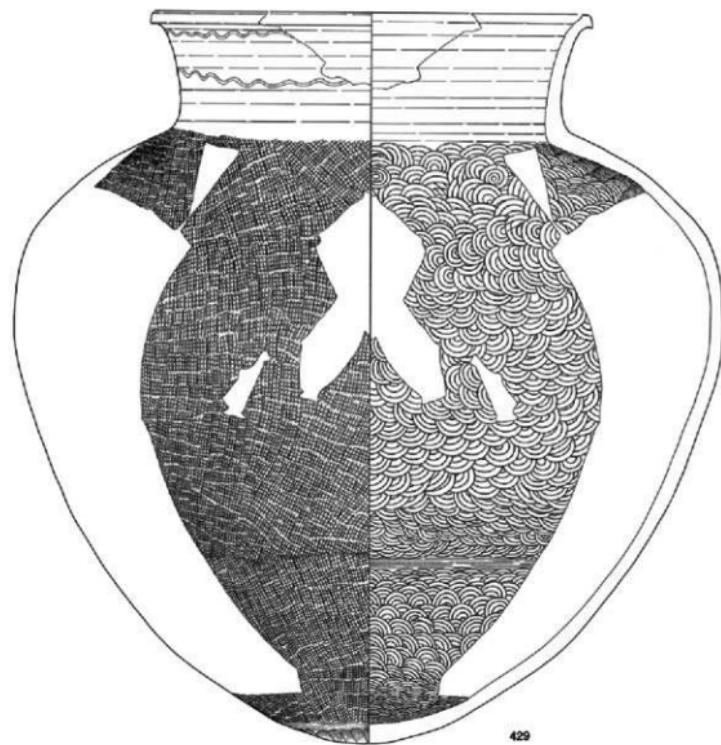
427



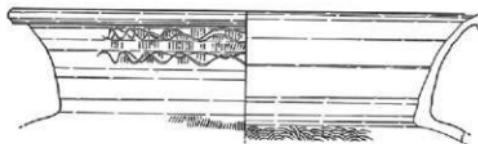
428



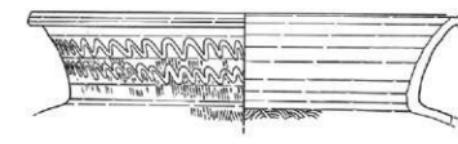
第52圖 大神麻跡出土須惠器実測図 44



429



430

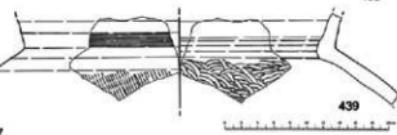
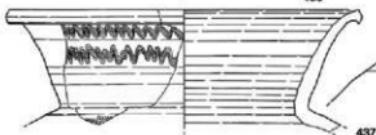
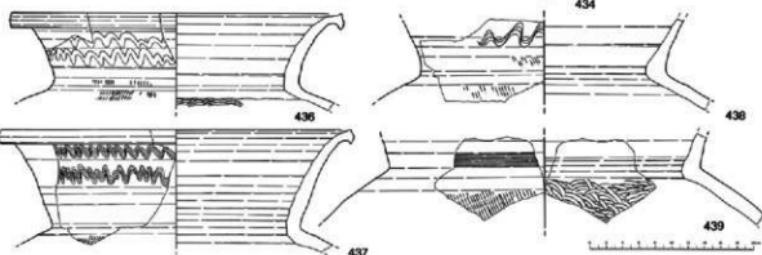
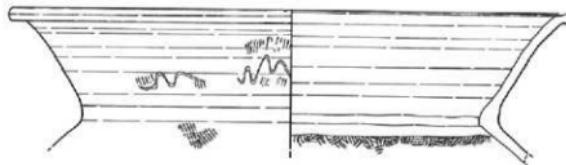
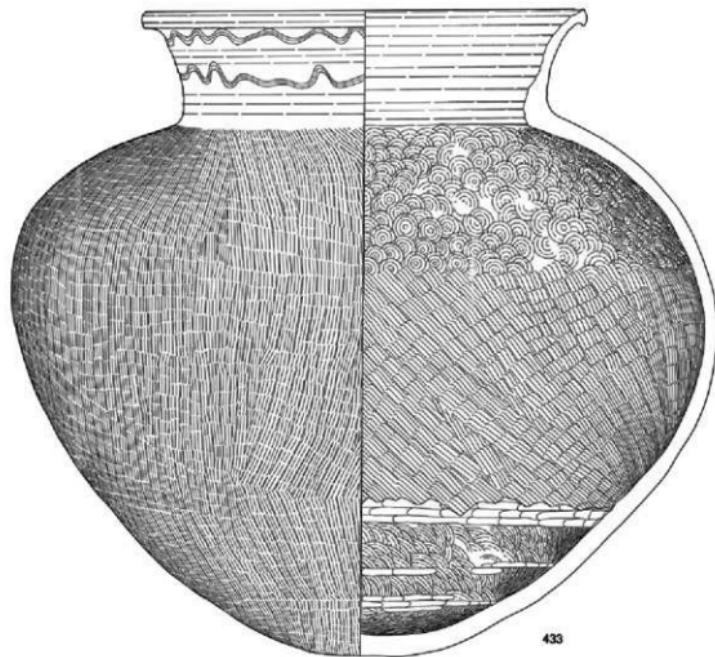


431

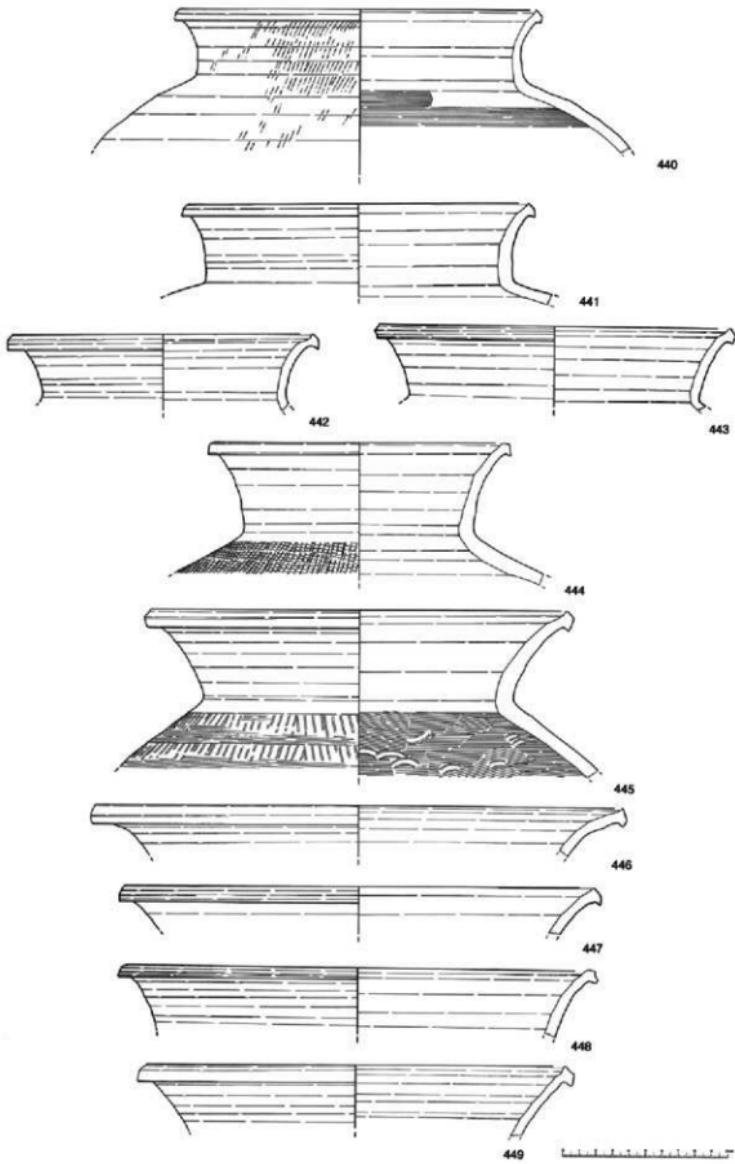


432

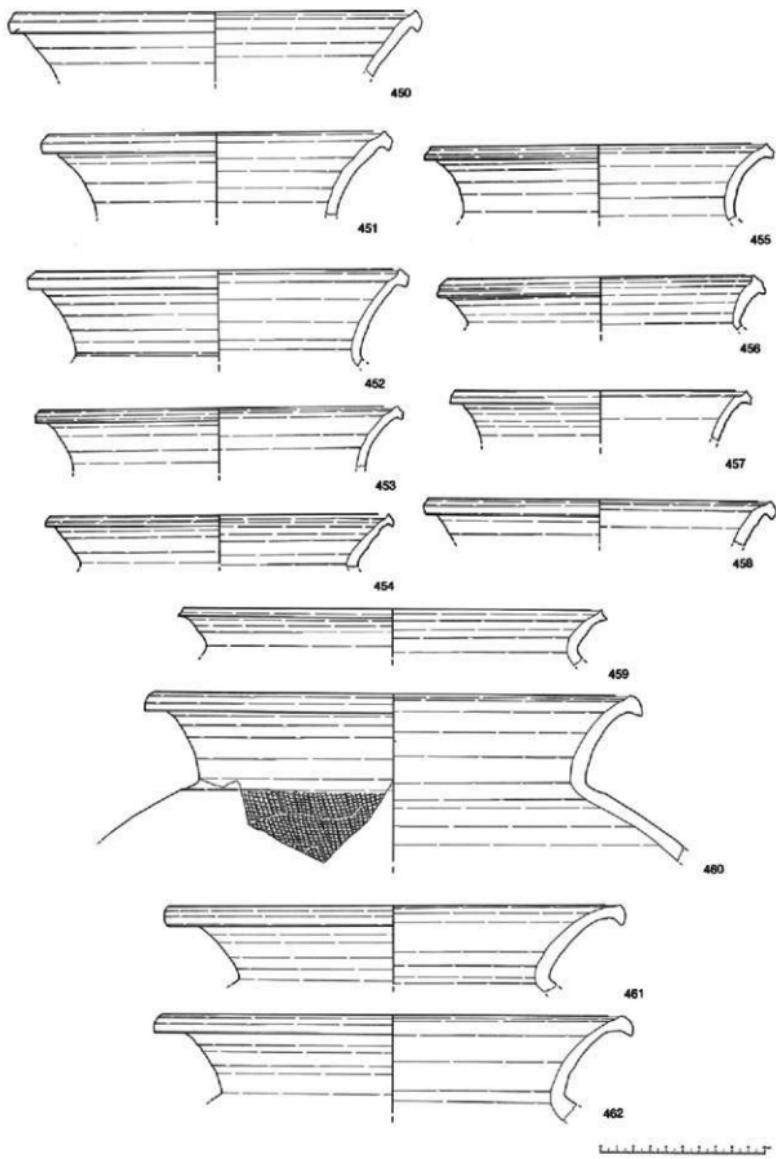
第53図 大神窯跡出土須恵器実測図 (4)



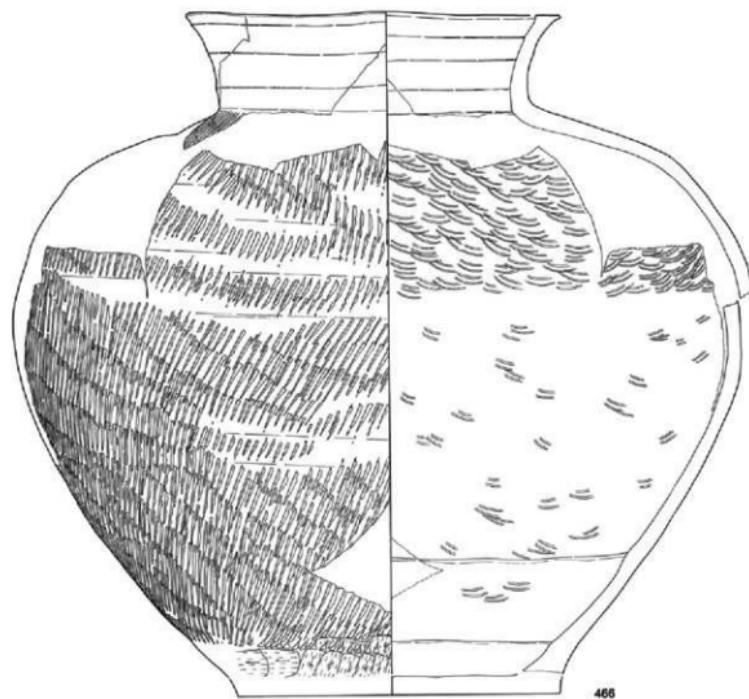
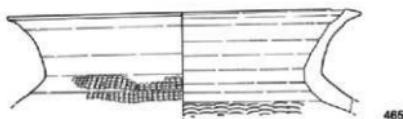
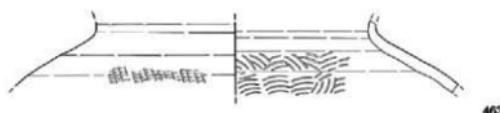
第54図 大神窟跡出土須恵器実測図 (6)



第55図 大神塚跡出土須恵器実測図 47



第56図 大神窟跡出土須恵器実測図 46



第57図 大神窯跡出土須恵器実測図 46